リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～チートに反逆する者達～

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～チートに反逆する者達～

【Ｎコード】
Ｎ９８９６Ｗ

【作者名】
紅優也

【あらすじ】
リリカルなのはのオリジナル小説です。
主人公はチートな強さを手に入れます。
多作品キャラクターも出現します。

プロローグ（前書き）

始まり

プロローグ

ゼロムＳＩＤＥ

グサ！

「……え？」

僕『ゼロム・グラシアム』は胸に刺さった短剣と目の前にいる男性『レイス・クロフォード』を交互に見つめる。

「れ、レイス……さん？何……で？」

間違いだと思いたい……だけど……

「『何で？』ふっ、『元・犯罪者』である君を抱えておくのは『時空管理局』においてもはや不要になった。よって僕が君を殺す……文句あるかい？」

失血の為だろうか段々と視界が暗くなってゆく。

「ま、無駄に長生きさせておくきも無いけどね『アークエンジェル』セットアップ。」

『了解。』

レイスさんの体にまるで天上の神々の服を持ってきたかの様なバリアジャケットが装備され小脇には純白の槍『ミカエル』を抱えている。

「さ、死のうか。ああ、『キャロ』ちゃんと『カリム』については安心して良いよ。僕のハーレムの一員にするから。」

！？そんな事……義母さんとキャロにそんな事絶対にさせるもの……か……

僕の意識はそこで途絶えた。

……

レイスＳＩＤＥ

「な！？」

僕の目には信じられない事が映った瀕死だったゼロム・グラシアムが溶けるように消えたのだ。

「……何かの魔法か？」

まあ、いい。これで僕のハーレム作りを邪魔するのは他の転生者だけだ。

「レイス君！」

おっとなのはか。

「なのは！無事だったんだな！」

「うん！」

「レイスさん！ゼロムは！？」

何でキャロが入るんだ？

「解らない。魔力反応がしたかと思うといなかったんだ。」

嘘だけどね。

「そう……ですか……」

「キャロ、大丈夫だよ。ゼロムは絶対に戻ってくるよ。」

「キュクルー！」

ち、励まさなくて良いっつうの。

「まあ、ゼロムの事は気になるけどまずは帰還しよう。」

「「「はい（うん）！」」」

ま、なのは達はこれからゆっくり堕としていけば良いか。

こうして『ＪＳ事件』と称された事件は一人の行方不明者を除いて終結した。

しかし彼等は知らないゼロムが死神に魅入られて帰還するなど……彼等は知らないゼロムが最強の力を手に入れるなど……彼等は知らないゼロムが仲間達と共に『ＪＳ事件』を上回る恐怖と騒乱を巻き起こすなど……彼等は知らないその事件で『時空管理局』が消滅するなど……

プロローグ（後書き）

如何でしたか？
次回『少年の行方』
次の空にドライブイグニッション！

第一話～少年の行方～（前書き）

オリキャラが登場！

第一話〜少年の行方〜

ゼロムＳＩＤＥ

「う、う〜ん……此処は？」

何故か僕は黒一色の謎の空間にいた。

「此処は一体何処だろう？」

「気が付いたか。」

「！？『ゼロ』！セットアップ！」

僕は後ろからの声に咄嗟に振り向きつつデバイスを起動させるが……

「……え？起動……しない？」

「当たり前だ此処は俺が支配している空間だ。あらゆる武器は使ってもなまくら同然だし魔法も起動せん。」

そうなんだ……

「さってと……『ゼロム・グラシアム』此処が何処か解るか？」

「……地獄かな？」

「……何故だ？」

「僕は昔キャロや義母さんに出会う迄は孤独だという恐怖に耐えられずゼロを使って人殺しをしてただからかな。」

「!?（何だこいつ!?幾ら何でも落ち着き過ぎている一体僅か十二年でどんな人生を過ごして来たんだ!?）」

「さっさと地獄に連れてって下さい。」

「あ、それ良いんだよ。」

「え?」

「俺は『死神』だ。」

「……ならば何故僕を地獄に連れていこうとしないんですか?」

「ふ、俺は『閻魔大王』に『ある種族』を徹底的に減らして欲しいって命令されてなそれでお前みたいな存在を集めてんだよ。」

「僕みたいな存在?」

「ゼロム・グラシアムお前は『プレシア・テスタロッサ』、『クライド・ハウラオン』、『リィンフォース』、『ティーダ・ランスター』、『アリシア・テスタロッサ』、『ゼスト・グランガイツ』、『クイント・ナカジマ』って知らんか?」

「?全員知ってますしリィンは僕のユニゾンデバイスですけど?」

「ふえ……呼びましたか?」

今までポケットの中で休ませていたリィンフォース?が出てくる。

「違う『闇の書』の管制プログラムの方だ。」

「……ああ、アインって呼ばれてた方ですね。」
「？お姉ちゃんやクライドさん達がどうかしたんですか？」
僕は目付きが悪かったけど僕の生い立ちを不憫に思って自分に似せたユニゾンデバイスをくれた銀髪の女性を思い出す。

「そいつらは『ＰＴ事件』及び『闇の書事件』からむこう十年で『本来なら』全員死亡している筈だった。」

「「……え？」」衝撃的な言葉にリィンも僕も声を無くす。

「お前等は『チート転生者』って言葉知ってるか？」

「……読んで字の如く他の世界から別の世界に蘇る際にその世界では有り得ない力を貰う事ですよね？」

「正解、やっぱお前頭良いな。」

「それでその人達がどうかしたんですか？」

「ああ、そいつらが最近ありとあらゆる世界に現れてな。好き勝手にそれらの世界の『Ｉｆ』やら『もしも～』やらでは方を付けられない事をやらかすんでな神が好き勝手にチート転生者を作り出さない様に見張ると同時に作り出されたチート転生者を始末するように俺達死神に命令したんだよ『特異点』さんよ。」

「『特異点』？」

「お前の様にチート転生者でもねえ原作キャラでもねえまあチート転生者（アホども）の言葉を借りるなら『オリキャラ』って存在だ。」

「え！？ゼロムさんはいないんですか！？」

「ああ、お前等の世界……通称『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ』の世界には『ゼロム・グラシアム』なんて名前の奴は一文字も出て来ねえ。」

「そう……ですか。」

「あ、そうだお前『希少能力（レアスキル）』が無いんだったな。」

「え？あ、はい。」

「あるぞ。」

「……え？」

何を言っているんだろう？

「やっぱ自覚してなかったか……お前の希少能力の名は『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』って能力だ。

複数の武器を扱う奴でな挙げると……」

僕の希少能力『神の卵』はまさしくチートだった。

内蔵してある武器は

刃先の厚さが単分子レベルしか無く鋭さのみを究極クラスにまで追及した『神剣フラガッハ』

超音波、超振動で振るった対象を分子レベルから破壊する『震動子ブレード』を持つ『幻獣（グリフォン）』

荷電粒子砲『ブリューナクの槍』を持つ『帽子屋（マッドハッター）』

『空間干渉能力』で空間転移したり、空間に歪みを生ませあらゆる物体を裂き破壊する『空間断裂』、『魔剣アンサラー』を持つ『チ

エシャ猫（チェシャ・キャット）』
ホログラムやビームを放つ『バロールの魔眼』を持つ『三月兎（マーチ・ヘア）』
これらを全て持つ……これが僕の希少能力『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』……

「と、まあこんな感じだな。因みに能力の吸収も出来るから更に高みを目指すことも出来るんだけどな。」

「おい、死神！いい加減俺達も紹介しろ！」

「アラン、落ち着きなよ。」

「と、アランと秦か。わーてるよ。ゼロム、これが今日からお前の仲間になる奴らだ。」

「アラン・クアルだ。出身は『ゼロの使い魔』で元の職業は暗殺者。能力はＦａｔｅの全サーヴァントの武器と能力。宜しくな。」
と、黒髪をポニーテールにしていてオレンジ色の瞳の人。

「新垣秦、出身は『迷い猫オーバーラン』の世界で学生だった。能力は『ＦＦ（ファイナルファンタジー）』の全召喚獣を召喚して使役したり憑依させて武器にしたりする事とピクミンを自在に生み出せる事。宜しくね。」
と、緑色の髪に深紅の瞳の人。

「あ、ゼロム・グラシアムです。宜しくお願いします。」
「リィンフォース？です。宜しくです。」
「固っ苦しい事は良い俺はアラン、こいつは秦で良い。」
「そうだよ僕等は仲間なんだから。」

「「は、はあ……」」

『……ふう、漸く言語機能が復活しましたよ。』

「ゼロ！戻ったんだな！」

『ええ、マスター取り敢えずレイス様に復讐をしましょう。キャロ様とカリム様に無事を伝えるのはそれからです。』

「復讐はしない。チート転生者を全員倒して二度とキャロや義母さん達に関わらない事を約束させる。どうしても諦めなかったら……殺す。」

「ふ、秦並みに甘いと思ったら存外冷酷じゃねえか。」

「アランさん、秦さん、僕は決めたからにはとことんやります。だから……協力してください。」

「うん。解ってるよ。」

「よっしゃ！やるか！」

「お前等！そろそろ転送するぞ。」

「「「「はい（応）！」」」」

……

「此処は……クラナガン？」

「クラナガンですね。」

「此処がお前の世界か……」

「平和そうだね。」

『お前等、そっから先に結構でかい研究施設があるからそこ攻撃しろ。初陣だから派手にやれよ。ついでだがそこにあるロストロギアも奪ってやれ。』

「へいへい……」

「うん。じゃあゼロ！セットアップ！武装は『イエーガー』！リィン！ユニゾン！」

『了解です。』

「はいです！」

「『ベリアス憑依』。及び『ピクミン召喚』。」

「やれやれ……『投影（トレース）・開始（オン）』」

……

第三者ＳＩＤＥ

［本部！本部！此方第十七研究所！謎の敵の襲撃を受けている至急増え……ぐわぁぁぁぁぁ！］

［な、何だこの植物みたいな奴ら火が効かな……ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！］

［ひいいいいい！来るな！来る……うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！］

研究所内部はまさしく地獄絵図だった管理局員、研究員問はず至る場所で胴体が消し飛んでいたり、全てが墨になっていたり、凍り付けになっていたり、袈裟懸けから切り裂かれていたり……まあ全て死んでいると言うことだ。

その中で無傷なのは四人しかいない。

一人は深紅の焔を纏い巨大な斧剣を軽々と扱い赤、青、黄、紫、白の植物の様な生命体を指揮する男『新垣秦』。

一人は紅い外套を羽織り更に顔を黒いフードで隠し両手には身の丈よりも長い刀と槍を持った男『アラン・クアル』。

一人はネイビーブルーの鎧の様な物を装着しており手には可変式ライフルを持ち両手に爪を装備しそして首にはペンダントを掛けている少年『ゼロム・グラシアム』。

一人は銀髪の髪に手には魔導書を持ち背中には騎士剣を背負った少女『リィンフォース?』。

彼等は只今並み居る敵を打ち倒しつつロストロギアの収蔵庫に向かっていた。

「おい、ゼロム。ここで良いのか?」

「あ、はい。あってます。」

「やれやれ……漸くか。」

『さっさと奪ってずらかりましょう。』

「……やっぱりゼロムさんのデバイスって口が悪いです。」

アラン、ゼロム、秦、ゼロ、リィンの順に言いながら扉を開く。

中には……

「……メダルと石板？」

紅い鳥の紋様（鷹、孔雀、コンドル）が六枚と緑の虫の紋様（クワガタ、カマキリ、バッタ）が六枚と白い獣の紋様（サイ、ゴリラ、ゾウ）が五枚と青い魚の紋様（シャチ、ウナギ、タコ）が三枚、黄色い野獣の紋様（ライオン、トラ、チーター）が四枚と紫の恐竜の紋様（プテラノドン、トリケラトプス、ティラノザウルス）が十枚、黒い幻獣の紋様が三枚あった。

「これって……」

「おいおい死神の野郎こんなちゃちい物奪ってこいって言ってんのか？」

「これ……『仮面ライダーオーズ』のコアメダル？」

「欲望の王のメダル……只のお伽噺のだと思ってたのに……」

「……え？何？知らないの俺だけ？」

「あ、知らなくても不名誉じゃないよ。これ僕等の世界ではテレビに出てくるアイテムだったから。」

「秦さんの世界ではそうかもしれませんが僕の世界では聖王に反旗

を翻した人物が持っていたもので……『ドザアぁぁぁぁぁぁぁぁ！』
わぁ！？」

「『セルメダル』！？しかもこんな大量の！？」

「何で上空からこんな物が……へ？」
アランが惚けた様な声を出した訳それは……

「う～ん……此処は何処だ？」
コアメダルがあった場所に藍色の髪をメッシュにした女がいたからだ。

「誰！？」

「ん？私の事か？私は幻獣系のコアメダルのグリード『アルテマ』だ。お前達か？私を目覚めさせ……［そこまでだ！侵入者どもめ！］人の話を最後までさせろ。」
そこには武装隊員が三十名いた。

［いかにお前等が強いといったって是だけの数にはかなうまい！］
「遺言はそれだけか？」
何時の間にかアルテマが隊長の前に立っており漆黒の騎士剣を構えていた。

［な……］
「切り裂け……『斬鉄剣』！」
次の瞬間隊長はおろか周囲の隊員すら胴体から両断された。

「ま、これで私もお前等の仲間入りだな。世話になる。」

「は、はあ……」
「強い……」
【此方機動六課です！応答して下さい！】
！？機動六課……なのはさん達か！
［ざ、ざまあみやがれ！もうすぐお前達はお仕舞いだ！］
「お前等がな。『アンク』……使うぞ！変身！」
《タカ！クジャク！コンドル！タ～ジャ～ドル～！》
紅いメダルを石板が変化したベルトに装填した瞬間歌と共にアルテマの頭がタカの頭を模した『タカヘッド』へ体がクジャクの体を模した『クジャクボディ』と武器『クジャクスピナー』へ足がコンドルの足を模した『コンドルレッグ』へと変化し彼女は『仮面ライダーオーズタジャドルコンボ』へと変身していた。
「うわあ！凄いや！本物のオーズのタジャドルコンボだ！」
［ば、馬鹿な……欲望の王だと……？］
「ついでだ。消し飛べ。」
《タカ！クジャク！コンドル！ギンギンギン！ギガスキャン！》
「うし、消し飛べ！『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』！」
「『地獄の火炎』。」
「『ブリューナクの槍』！発射！」

「『ディアボリックエミッション』！」

……

数分後急行した機動六課のメンバーが見たのは炭と化した三十名の武装隊員達だった。

次回へ続く……

第一話～少年の行方～（後書き）

如何でしたか？
次回『襲撃と回収と撤退』
次の空へドライブイグニッション！

第二話～襲撃と回収と撤退～（前書き）

戦闘回です。
キャロが強くなっています。
アンクが出現します。

第二話～襲撃と回収と撤退～

第三者ＳＩＤＥ

第七十七管理外世界

此処は地球とほぼ同程度の環境の惑星が数個あるが何れも危険な生物が多数徘徊しているため文化レベルゼロと認識されており次元犯罪者にとっては格好の逃走場所であると同時に下手をすれば原生生物達に八つ裂きにされかねないため常に危険と隣り合わせの世界である。

その中で地球と同程度の環境の惑星の一つ第二惑星『アルナ』にある洞窟の一つにゼロム達は潜伏していた。

……

ゼロムＳＩＤＥ

「……」

僕達がこの洞窟に潜伏してから早1週間、僕は何故か浮かない顔をしているアルテマさんを見てどうしたんだろうと思った。

「あの……アルテマさんどうしたんですか？」

「ん？ああ、ゼロムか……なあお前の周囲に『鳥の化け物の右腕と左の翼』を持った人間いないか？」

「はあ！？」

何を言ってんのこの人！？

「実はな……何故か鳥系のコアメダルのグリードである『アンク』になってみたんだ。そしたら何故か左の翼が出ず右腕がそのままでなまあ……コアメダルが六枚しか無いからだろうが……このままだとアンクが怒りかねんので回収したいんだ。」

「そうなんですか……あ、思い出した。」

「本当か！？誰だ！」

「ぐえぇぇぇぇ！？あ、アルテマさん！首！首！締まります！」

「あ、すまん。」
全くこの人は！

「え～と……僕がもといた部隊の人の弟なんですけどその人が鳥の足を腕にしたような右腕と左の翼がありました。」

「ほう……名前は？」
こ、怖い……

「た、『高町ユウヤ』さんです。」

「高町ユウヤか……くっくっくっ……！人の友人の腕と翼を勝手に使いやがって……只じゃおかん！」

「はい、ところでアルテマさん……」

「何だ！」

「外。」

「ん？」

そこにはこの惑星の原生生物の一種で群れで生活し更に……キングオブホモと同じ顔をした青いつなぎを着ているゴリラの様な生命体『アーベ』が雄雌とはず大量にいた。

［［［［うほ。良い男（女）やらないか？］］］］

「「やらないよ（やらんわ）！」」

取り敢えず機動六課の隊舎に行く前にこいつらを絶滅させたほうが良いみたいだね……

僕は危うく襲われそうになるのを防ぎながらそう思った。

……

キャロＳＩＤＥ

「……はあ。」

機動六課の隊舎の屋上で私『キャロ・ル・ルシェル』は一人ため息をついていた。

「（ゼロム君……今何処にいるの？）」

最愛の少年を思いながら。

（最もその少年は只今絶賛グリードと共にホモゴリラの大群を殲滅中だが。）

「はあ……やっぱりダメなのかな？」

私は一年前のＪＳ事件終結後からエリオ君やルーテシアちゃんとゼロム君を探したけど手がかり一つすら掴めない……

「うううう……う（ポロポロ）」

「きゅる〜〜〜。」

無意識の内に泣いていた私の涙を契約している龍の一体のフリードが顔を舐めて拭き取ってくれた。

「フリード……ありがとう。大丈夫だよ。」

そうだよね……めげちゃダメだよね。

そう思っていたら……

「（パサ）？黒い……羽？」

何処からか黒い羽が落ちてきたかと思った瞬間……

ズガアァァァァァァァァァァン！！

凄まじい轟音と共に隊舎が揺れた。

「え！？」

私が狼狽えている内に突如として目の前の空間が歪み始める。

「！？これって！『ケリュケイオン』！セットアップ！」

目の前に現れた空間の歪み……1週間前の第十七研究所襲撃犯の一人が使用していた能力だつまり……

「襲撃犯が来てる！」

「キャロ！」

「キャロ大丈夫？」

屋上の扉が開かれエリオ君とルーテシアちゃんが現れる。

「エリオ君！ルーテシアちゃん！さっきの爆発は一体何？」
「研究所の襲撃犯が此処を強襲してきたんだ！今シグナム副隊長達が応戦してる。」
「そんな……！」
「それよりも今は目の前の敵。」
「え？ああ、うん！」
守らなきゃ……！皆をゼロム君やなのはさん達の様に！
しかし……
「到ちゃ……く……え？」
出て来た相手は私達の想像を遥かに上回っていた。
「……うそ」
銀髪に藍色の瞳……？
「まさかそんな……」
「……まさか寄りにもよって君達と鉢合わせするなんてね……キャロ、エリオ……」
「「ゼロム（君）……？」」
私が一番大好きな『ゼロム・グラシアム』だった……
……

ゼロムＳＩＤＥ

今から数分前……

僕達は今アルテマさんから機動六課襲撃作戦の説明を受けてるんだけどそれは奇襲というより強襲が正しい説明だった。

先ずアルテマさんが上空から魔法で機動六課周辺を爆破する。

敵がそれに応戦している隙に僕は六課の隊舎の屋上に『チェシャ猫』（チェシャ・キャット）の能力で移動し待機。

そして合図（アルテマさんが炎を上空に撃つ）が出たら『ブリューナクの槍』でユウヤさんを狙撃する。

ユウヤさんが死ぬなり怪我するなりして動きを止めたらアルテマさんがコアメダルを奪取する。

再び『チェシャ猫』の能力で離脱。

と、いう流れだったんだけど……

「（寄りにもよってこの二人に再開するだなんて……！）」

僕の最愛の少女と僕の親友であり好敵手の少年である『キャロ・ル・ルシェル』と『エリオ・モンディアル』が僕の目の前にいる。

「ゼロム君……何で？どうして……？」

「ゼロム！何で君が犯罪なんかするんだ！もう犯罪なんてしないって言ってたのに！」

「そ、それは……」

どうする……どうすれば良いんだろう……？

「二人ともゼロムは操れてるかも……」

ルーテシア・アルピーノ！？

でも……助かった！

「操れてる……？」

「それなら納得も出来る！」

「だったら……」

「やる事は一つだよねエリオ君！」

「「ゼロム（君）！少し痛いかもしれないけど……助ける！」」

結論が速すぎる！

「『ストラーダ』！セットアップ！」

「『アスクレピオス』セットアップ。」

エリオとルーテシアの体がバリアジャケットに包まれたのを見た瞬間に僕は補助魔法を持つキャロを撃破すべく走りだす。

「させない！『ガリュー』！」

「うわ！？」

でもルーテシアの召喚獣である『ガリュー』の拳に止められる。

不味い……！

「今！『アルケミックチェーン』！」

バインドの一種であるアルケミックチェーンが僕の体に巻き付こうとする……だけど！

「僕だって……手に入れたんだ！力を！『神剣フラガッハ』！」
即座に鋭さを究極クラスに高めた剣を使い両断する。
「な！？『ゼロ』じゃない！？」
「デバイスを変えたの！？」
「違う！これが僕の希少能力（レアスキル）……『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』の力だ！」
「え！？だってゼロム君は希少能力が無いって……」
「目覚めさせた人曰く『自覚してなかった』だけだって。」
「くっ！だけど切れ味が良い剣だけなら！」
エリオが自身のデバイスであるストラーダの槍の穂先を構えて突貫する。
……なら！
「甘い！『帽子屋（マッドハッター）』！『ブリューナクの槍』……発射！」
即座に荷電粒子砲を放ち迎撃するのみだ！
「エリオ君危ない！『プロテクション』！」
「ストラーダ！『プロテクション』！」
エリオとキャロの防御魔法の『プロテクション』の二枚重ねが辛うじて『ブリューナクの槍』を防ぐ。
「だから……甘いんだよ！」
僕は即座に『チェシャ猫』を起動させてエリオの目の前に瞬間移動

し更に『幻獣(グリフォン)』を起動させ『震動子ブレード』を振るう。

ギャリィィィィン！

「ぐぅ！？」

エリオ達のプロテクションとぶつかり……

ズバン！

「な！？くそお！」

ガキン！

超音波と超震動で断ち切る刃の為一瞬でプロテクションが切り裂かれエリオの槍とぶつかり合った。

「『アルケミックチェーン』！ガリュー！」

次の瞬間僕の体がルーテシアが放ったアルケミックチェーンにがんじがらめに縛られガリューが殴りかかるが……

「甘いよ……」

ブゥ……ン

「「「！？」」」

それは『三月兎(マーチ・ヘア)』の能力『バロールの魔眼』で作られたホログラムだよ。

本物の僕は『チェシャ猫』の能力で三人の頭上に移動している。

「ゼロ！セットアップ！武装は『シュナイダー』！」

『了解。』

その言葉と共に僕の体に黒の軽装の服とともにオレンジ色の鎧が装着され体の周りに上下に銃口が付いた七本の剣が漂う。

これが僕のデバイス『ゼロ』……いや僕がここに来る前の世界では

『ライガーゼロ・改』と呼ばれていた機体のバリエーション武装の一つ……近接戦闘用武装『シュナイダー・バースト』だ。

「『セブンブレードバースト』……シュート！」

シュナイダーの七本の剣『ブレードビット』に搭載されている一本に二つ……計十四の銃口に光が溜まり僕の前方に集結した後中央に光が集まり巨大なビームを放つ。

「な！？『プロテクション』！」

エリオが慌ててプロテクションを張るが……遅い！

だけど……

「……行けるよね……『ケリュケイオン』！お願い！」

まるでキャロの声に応えるかの様にバリアジャケットの背中に本来ケリュケイオンに無いもの『騎士剣』が装備された。

「な！？だけどそれくらいなら！」

「それだけじゃない！ゼロム君が力を手に入れたなら……私だって同じ！『ディバインセイバー』！」

キャロの騎士剣に魔力刃が出現してセブンブレードバーストとぶつかり合った瞬間……セブンブレードバーストが消し飛ばされ僕の体は屋上から弾き飛ばされた。

……

三人称ＳＩＤＥ

ゼロムがキャロ達と戦闘に突入する数分前……

ゴオォォォォォォォォォォォォォォォォ！
機動六課の隊舎の上空ではアルテマが巨大な黒炎を発生させていた。
「さあ～～～てと！派手に燃えろぉぉぉぉぉ！」
「燃やしちゃダメですよ。下手すれば僕らゼロムから恨まれかねませんよ？」
と、秦がアルテマを諭す。
「ああ、それはそれで面白そうだが俺もゼロムとは闘いたくない。」
と、アランも秦に同意する。
「む、別にあそこは燃やす気は無いぞ只まわりを焼き尽くすだけだ。食らえ！」
ズガァァァァァァァァァァン！
爆音と共に隊舎が揺れそれに驚いたのか一般の局員が出てくるが……
「はあ、『マティウス憑依』。序でに……『氷天撃』！」
一瞬で秦に氷の彫刻にされた。
「おいおい……英雄さん達がいる部隊にしちゃ脆い……『飛龍……一閃！』のわあぁぁぁぁぁ！？」
油断していたアランには漏れなく浅いとはいえ火炎の一撃が炸裂して吹き飛ばされたが。
「ちい！浅かったか！」
と、言いながら隊舎から出て来た桃色髪の女性『シグナム』が無傷のアランを見て舌打ちを打つ。

「シグナムさん大丈夫ですか！？」
そして続いて隊舎から出て来た深紅の髪の青年『高町ユウヤ』には……

「見つけたよ……『アンク』の片割れぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
アルテマが黒い騎士剣『斬鉄剣』を構えて突進する。

「ユウヤさん危ない！『ディバインバスター』！」
最も隊舎から出て来た青色の髪の少女『スバル・ナカジマ』に横殴りからの一撃を食らい断念したが。

「序でに食らえ！『ラケーテンハンマー』！」

「やらせないよ！『ハシュマリム憑依』！『ルックユー』！」
続いて隊舎から出て来たロリ体格の女性『ヴィータ』が追撃の一撃を放つも秦が憑依させた召喚獣『統制者ハシュマリム』の攻撃で弾き飛ばした。

「『アクセルシューター』！シュート！」

「おっと！『世界樹の盾』！」
オレンジ色の髪の少女『ティアナ・ランスター』が秦に狙撃するが復活したアランが投影で生み出した盾で消し去った。

「おらあ、食らえ！『カマイタチ』！」

「あめえ！『フレイムボール』！」
と、横合いから襲い掛かった緑色の髪の青年『上町雪羅』が風を放つが予測していたかね様にアランが自分の世界の魔法を使い打ち消

す。

「お前達は何なんだ！？何の為に平和になった此処を乱そうとする！」

「は！ガキを一人見殺しにした薄情者どもが何を言いやがる！」

「見殺しにした？誰を！？」

「自分の胸に聞いてみな！元犯罪者が！」

「てめえ！俺達の仲間を犯罪者呼ばわりしやがって！只じゃおかねえ！」

「うるさいんだよ雑魚。」

「何を……『ズガアァァァァァァァァン！』この上何だ！？」

「屋上から！？（ゼロムの奴は何をやってんだ！？）」

「一体何が！？」

彼等は互いを警戒しつつ上を見るそこには……

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ぐう！？まだまだぁぁぁぁぁ！」

機動六課全体で見ても大人しい少女『キャロ・ル・ルシェル』が騎士剣を扱う姿と『ゼロム・グラシアム』が死闘を繰り広げている姿だった。

「「「「「「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」」」
戦う事も忘れ全員が驚愕の声を上げる。
「あの馬鹿何やってんだ！？」
「てか、キャロ何時の間に剣技なんて覚えたの！？」
等々様々であったが。
「は！？隙あり！」
「な！？うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
いち早く正気を取り戻したアルテマがユウヤを殴り飛ばす。
「！？ユウヤさん！『アクセルシューター』！シュート！」
「させない！『ブレードシューター』！シュート！」
空中で激戦を繰り広げている二人はキャロがユウヤが追撃されない為に射撃で牽制しようとすればゼロムがそれを剣に装備されている銃口からビームを出しそれを打ち消す。
「ふう……さあコアメダルを返し……」
気絶したユウヤにアルテマが近寄った瞬間……
「な！？消え……「ギガント……ハンマー！」ぐはあ！？」
霧の様にユウヤが消えそれに気を取られている内にヴィータのハンマーの一撃を浴びてしまう。
「ぐ！？貴様……！不意討ちたあ騎士のやる事じゃ無いな！」

「言ってろ！ゼロムとキャロを無理やり戦わせやがって！すぐにてめえら全員叩きのめしてゼロムの洗脳を解いてやる！」

「は？洗脳？何を言って……むぐー！？」

「（口裏合わせて下さい！ゼロムがいざ捕らえられた時に無罪になるかもしれませんよ！？）」

「（てめえが口を滑らして洗脳してないって言ったらあいつ犯罪者確定なんだぞ！）」

ゼロムが洗脳されてると勘違いしているヴィータに一計を案じた秦とアランは余計な事を言おうとしたアルテマの口を慌てて塞ぐ。

「ぷは！？いきなり口を塞ぐんじゃ……『ゴン！』ぎょばぁ！？」

塞がれていた口が解放された瞬間抗議しようとしたアルテマの頭に空中から墜落してきたゼロムが直撃した。

「あ、痛たたたた……しまった魔力切れだ……」

「はあ！？（お前は洗脳されてると勘違いされてる。）」

「どういう事だよ！？（だから少し命令口調になるけどごめんね。）」

「す、すいません……シュナイダーは元から燃費が悪くて……（了解。）」

因みにゼロムが言った『燃費が悪い』とはシュナイダーはエネルギーシールドや七本のソードビットを装備している為にエネルギー消費率はライガーゼロの武装一とも言って良いので幾ら改造型だからといっても武装を追加しているのだエネルギーの消費率はお世辞にも良いとは言えないのがシュナイダーの現状である。

ガッ！
「全員動くな！こいつがどうなっても良いのか！」
復活したアルテマがゼロムの首に手を回し締めはじめる。
「てめえぇぇぇぇ！」
「卑怯だぞ！」
「何とでも言え。お前達が私の要求を聞けばこいつを解放してやる。」
「要求？何だ！」
「高町ユウヤ、お前の中にあるメダルを寄越せ。」
「！？」
「簡単な事だろう？それとも何か？友人の恋人「違います！」を見捨てて自分だけ助かろうと言うのか？」
キャロに突っ込まれたが構わず己の要求を告げるアルテマ。
そして……
「……解った。」
「ユウヤさん！？」
「（大丈夫だよ。スバルさんすぐに取り替えせるし。）」
「そうか、じゃあメダルを先に寄越せ。」

「いや、ゼロムが先だ！」
「やだね。先に渡して攻撃されたらたまったものじゃない。」
「そうか……だったら攻撃しないから同時に渡さないか？」
「……解った。良いだろう。」
交渉が成立したのでユウヤが腕から紅いコアメダルを取出し、アルテマがゼロムの首の拘束を解く。
ユウヤがコアメダルを投げ渡しアルテマが手を伸ばした瞬間……
「今だ！」
『タカカン！』
ユウヤはカンドロイドを起動させコアメダルを回収せんと飛翔させる。
しかし……
「やはりな。ふん！」
一撃で破壊されてしまう。
「しま……！」
「交渉決裂だな。こいつは返さん。……『創造（クリエイト）』！」
言葉を言った瞬間アルテマの手には『十二枚』の紅いコアメダルが鎮座していた。
「は！？」

「何でえ!?」

「ああ、言ってなかったな。私は全枚揃ってたら各コアメダルを一枚ずつ生み出す事が出来るんだ。」

「つまりコンボ分創れると?」

「そういう事だ。蘇れ!『アンク』!」

アルテマの言葉と共にコアメダルが光とともに寄り集まりセルメダルがどこからともなく出現し一つの体を作り上げる。

光が治まるとそこには紅い鳥の様な姿をしたグリード『アンク』がそこにいた。

「よう、アルテマ……久々だな。」

「ああ、アンク、久々だ。……ほれ『焔』だ受け取れ。」

そういってアルテマは彼女がアンク用にに作った深紅の槍『焔』をアンクに手渡す。

「くくく……さあ皆殺しだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

アンクがそういった瞬間凄まじい覇気が舞い上がり機動六課陣は誰もが思った

「「「(勝てない……!)」」」と。

「終わったな……『ゴイン!』フゴバ!?」

彼女に高速で何かがぶつかった。

「いつつ……な!?『サイヤミー』!?『カマキリヤミー』!?『

タカヤミー』！？どうしたんだお前等！？」
彼女がアンクのコアメダル、昆虫系のコアメダル、重力系のコアメダルを使って足止めとして生み出したヤミー達であった。
最も次の瞬間セルメダルの山に変わったが。

「良くもユウヤや皆を……！絶対に許さないんだから！」

「それにゼロムをキャロと戦わせるだなんて……！倒す！」

「公務執行妨害及び器物破損で現行犯逮捕する！」

高町なのは、フェイト・T・ハウラオン、レイス・クロフォードの三人が口々に言いながら五人に迫る。

「させないです！『フレーズベルグ』！」
今まで出る機会が無かったリィンフォース？が氷結魔法である『フレーズベルグ』を三人に放ち牽制する。

「よし、今だずらかるぞ！」

「おいおい、俺戦ってねえぞ！？」

「安心しろ後で存分に戦わせてやる！」

「……お前が言うなら信じてやる。」

「二人とも準備出来たよ！」

「ゼロム君を……返して！」
キャロが騎士剣を構えながら迫るが……

「小娘が！いきがんじゃねえ！『フレイムランス』！」
アンクが焔を突きそれが火炎の槍になりキャロに突き進む。

ガキィィィィィン！ズガン！
「きゃあ！？」
キャロは辛うじて防ぐが騎士剣に当たった途端槍が爆発し目眩ましとなり……煙が晴れた時には彼等は既に居なかった……

次回へ続く……

第二話～襲撃と回収と撤退～（後書き）

如何でしたか？
後一回やったら主人公勢力の紹介したいと思います。
次回『急襲と初殺しと重武装』
次の空にドライブイグニッション！

第三話～急襲と初殺しと重武装～（前書き）

他作品のキャラクターが登場します。
ゼロムの過去が少し解ります。

第三話～急襲と初殺しと重武装～

第三者ＳＩＤＥ

第七十七管理外世界

第二惑星『アルナ』の洞窟。

「「「「「「「……。」」」」」」」

そこでゼロム、アルテマ、アンク、アラン、秦、リィン？の六人がゼロムがゼロを使って管理局のコンピューターにハッキングをして手に入れたデータを見て仏頂面になっていた。

「まさか、機動六課に『ガイアメモリ』と『Ｗドライバー』が運び込まれるだなんてね……」

「ああ、私とアンクにとっては何の脅威も無いがな。」

「まあな。」

「と、言うよりガイアメモリって何だ？」

「ああ、『地球の記憶』をメモリに保存したアイテムでね。それを剥き出しのまま使うと『ドーパント』っていう怪物になるんだけど専用の『ドライバー』に装填すると仮面ライダーに変身出来るんだ。因みにこれ全部『仮面ライダーＷ』用のガイアメモリだね。」

と、秦がおもむろに紙に映っているガイアメモリを準に指差す。

「『Ｃ』は『サイクロン』。『風の記憶』を記した『ソウルメモリ』。『Ｊ』は『ジョーカー』。『切り札の記憶』を記した『ボディメ

モリ』。『L』は『ルナ』。『幻想の記憶』を記した『ソウルメモリ』。『T』は『トリガー』。『射手の記憶』を記した『ボディメモリ』。『H』は『ヒート』。『火の記憶』を記した『ソウルメモリ』。『M』は『メタル』。『闘志の記憶』を記した『ボディメモリ』。因みにWは基本『サイクロンジョーカー』、『ルナトリガー』、『ヒートメタル』っていうフォームが基本だけど他の組み合わせもあるから気をつけてね。」

「つまり私の力と同じで複数の『コンボ』の様な姿と『亜種コンボ』の様な姿があるわけなんだな？」

「そういう事。」

「秦さんって……何でそんな事知ってるんですか？」

「ああ、『仮面ライダー』好きでね。良く見てたよ。」

と、秦が過去を見るように寂しげな顔になる。

「す、すいません。じゃあ今回陸士１０８部隊に運び込まれるこれは何ですか？」

そういいながらゼロムは二枚目の紙に映っている『A』と書かれたメモリと『E』と書かれたメモリを指差す。

「『A』は『アクセル』。『加速の記憶』を記したメモリで『仮面ライダーアクセル』に変身するためのメモリだね。『E』は『エターナル』。『永遠の記憶』を記したメモリで『仮面ライダーエターナル』に変身するためのメモリだね。」

と、秦がすらすらと応える。

「ついでに言うと『ガメル』のコアメダルが三枚と『カザリ』のコ

アメダルが二枚一緒に運ばれてる。」
そんな事なんて良いからさっさと行こうと言っているかの様にアルテマが口を出す。

「ああ……」
「ですね……」
「その前に……」

［［［［うほ。良い男（女）やらないか？］］］］

「「「「「「やらねえよ（やらないよ）（やらんわ）（やりません）！」」」」」」出撃する前にまたもやホモゴリラの大群を殲滅する羽目になったが……

……

ゼロムＳＩＤＥ

「さあ行きな『タカ・カンドロイド』。」
ホモゴリラ達を吹き飛ばした後僕らはガイアメモリとコアメダルの輸送経路を確認しそれを発見するためにアルテマさんがユウヤさんも使っていた『カンドロイド』を使い探していた。

「良し。大体百個も開けたから直ぐに発見されるだろそれまで体力を蓄えておけ。」

「はーい。」
さて、ここで彼等が休んでいる内に作者がカンドロイドについて説明しておく。

本来此方の世界のカンドロイドは古代にアルテマ達『グリード』が作り出した物で原作の『仮面ライダーオーズ』の様に『セルメダル』を燃料に動く物であるがコアメダルが掘り出された際にカンドロイドも掘り出された為に時空管理局が独自に改良し魔力で動く様に作られたのがユウヤが使っていたカンドロイドである。
因みにアルテマ達のカンドロイドは原作の色のままだが時空管理局製のカンドロイドは若干白が掛かっている。
それから『ライドベンダー』だが此方は時空管理局が独自に開発し此方もカンドロイド同様魔力で起動するように出来ている。（因みに一般人には只の自動販売機とされているので一般の公道にも置いてある）
それをアルテマ達が借り（正確には盗んだ）セルメダルで動く様にし（即ち原作仕様にした）専らアンクやアランが乗っている。

『ピィィィィィ！』

「あ、発見したみたいだね。」
親切な（？）作者のお陰で時間を潰せて良かった良かった。

……

第三者ＳＩＤＥ

「くそ！いきなり何だってんだ！」
「知らないよ！」
「兎に角応戦しろ！」
「数が多すぎるよ～～～！」
「くそ！『雪羅』！」
「この野郎！」
彼等はタカ・カンドロイド（因みに足止めの為かアルテマが更に数を増やして二百体にした）に案内されてやってきたがそこには管理

局員の茶色の制服では無く何故か修道服を着た人間が二人、学生服を着た人間が三人、私服を着た人間が一人がいた。

「だ、誰だ？あいつら？」

「一人は転生者っぽいけど……」

「あれ？『衛宮』さんに『吉井』さんに『平沢』さんに『織斑』さん？何であの人達まで護衛に付いてるんだ？」

「知ってるのか？」

「はい。衛宮さんは『魔術の師匠』の『うっかり』で吉井さんは『実験』の『失敗』で平沢さんと織斑さんは『時空の歪み』に巻き込まれて此処に来たらしいです。」

「と、すれば？」

「はい。『ＪＳ事件』の時も機動六課と一緒に戦いました。」

「う～ん……つまり管理局は『聖王教会』にガイアメモリとコアメダルの配達を依託したって事だね。」

「でしょうね……」

「と、すればあいつらを出し抜くのは簡単だね。ゼロム、お前の出番だよ。」

「……吉井さん達は殺さないで下さいよ？」下手をすれば吉井達が殺されかねない為ゼロムがアルテマ達に釘を刺す。

「解ってる。耳を貸せ。」

そして彼等は作戦会議に入った。

……
明久ＳＩＤＥ
「たく！何で積み荷を狙うのか解らないけど陰湿だね！」
僕『吉井明久』はぼやきながら僕のデバイス『村雨』の太刀『ムラサメブレード』を振るう。

「んな事言ってる暇あったら応戦しろ！」
と、隣で剣を振るっている『衛宮士郎』に怒られる。

「くそ！斬っても斬ってもキリがねえ！」
と、僕の隣でデバイス（みたいなものでＩＳ（インフィニット・ストラトス）と言うらしい）『白式』を振るう『織斑一夏』がぼやく。

「む～～～『スラッシュソング』！」
と、この中で唯一女の子である『平沢唯』が自分のデバイスになった『ギー太』にある魔法を使い（正確にはそれに魔力を注ぎ込みながら音楽を奏でると使えるんだけどね）敵を切り裂こうとするけどあっさり躱されてしまう。

え？何で『リリカルなのは』の世界に『バカとテストと召喚獣』やら『ＩＳ』やら『けいおん！』やら『Ｆａｔｅ』の主人公がいるかって？

それは士郎が『魔術の師匠のうっかり』で、僕は『ババア』の『実験の失敗』で、唯（友達だから名前呼びでも良いって言われた）と一夏はへんてこな渦（時空の歪みと言うらしい）に飲み込まれたら此処にいた。
んで、『カリム』さんの好意で聖王教会に居候させてもらってたんだけど流石に居候のままってのは嫌なんで皆で何かしようって事に

なって『機動六課』に入隊したんだ（その後色々あって僕とティアナが付き合う事になったけどまた後で）。

しかし僕等にとっては命の恩人であるカリムさんの義理の息子である『ゼロム』が行方不明になった時に皆で除隊した後ゼロムの捜索をしつつ（つい最近見つかったけど洗脳（？）されていたらしく戦闘になったらしい。）管理局の仕事をしているんだ。

「だあぁぁぁぁぁ！鬱陶しいんだよ×××どもがあ！」

「『宮崎』！何、女子も入るのに卑猥な言葉使ってんだ！」

騎士にあるまじき言葉を吐いた『宮崎仁』さんに士郎の痛烈な突っ込みが入る。

「うるせ……『ズギュン！』へ？」

一発の銃声がしたかと思うと次々とタカみたいな形をした敵が蹴散らされていく。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

と、同時にバイクに乗った女性がトンファーを一閃してもう数体撃破されると敵は逃走していった。

「あれ？『シャッハ』さんどうしたんですか？今日はカリムさんと一緒に豚……じゃなかった高官達の会議に行った筈……」

「吉井さん……それ幾ら本当の事でも言わない方が良いですよ？何時何処で誰が聞いているか解りませんから。」

「ゼロ君！？一体どうしたの！？」

「むぎゅ！？ひ、平沢さん！息！息が出来ません！」
シャッハさんと一緒にいたカリムさんの義理の息子の『ゼロム・グラシアム』（デバイスを展開したままの）がいきなり帰ってきたので唯が激しく抱きつく。
良いなあ……

「ああ、洗脳が一時的に解けたらしくてその隙に逃げ出してきたみたいです。それから平沢さん。騎士ゼロムが窒息死してしまいます。」
うん。僕から見てもゼロムの顔が青白くなっていくのが解る。

「え？あ、ごめんゼロ君。」

「死ぬ気で逃げ出してきたのに危うく天国に行きそうになりましたよ……」
ゼロムが肩で息をしながらそういう良かった、良かった。

「て、聞き忘れるところだったけどシャッハさん。どうして此処にいるんですか？」

「……騎士カリムが忘れ物をしたんですよ……はあ。」
……ご苦労様です。

「……義母さん本当に忘れん坊だから困るんだよね。」
シャッハさんとゼロムが同時にため息を付く苦労してるんだなあ……ん？
何か違和感が……まさか！？

「士郎！そのシャッハさん偽物だ取り押さえて！唯！ゼロムを早く

保護して！」
「は？何を言って……」
「え？あ、うん。」
唯がゼロムを抱えて一歩引く。
良し……！
「騎士吉井。何故私を偽物と言うのですか？」
「……方角ですよ。」
「方角……は！？」
「ええ、カリムさんと『本物』のシャッハさんが会議に行った方角は『西』でした。しかし貴方は『南』から来た……これは辻褄が合わないね！偽物さん！」
僕は偽物のシャッハさんにムラサメブレードを振るう。
「ち！ばれちゃしゃあねえな！『フレイムランス』！」
偽物は深紅の槍を振るい炎の槍が僕に迫る。
「甘いよ！砂糖水より甘いよ！『豪雨一閃』！」
ムラサメブレードから発生した水の刃が炎の槍を一瞬で掻き消した。
「何……」
「だあぁぁぁぁぁっしゃあぁぁぁぁぁ！」
驚愕している偽物に僕は渾身の勢いでムラサメブレードを振り下ろし袈裟懸けに切り捨てる。

が……
バラバラ……
「ち！まさかやられるとはな……だが……詰めが甘いな！やれゼロム！」
メダルの様な物が偽物から流れ落ち鳥の様な化け物が現れゼロムに命令する。
しまった！
「了解！『ストライクレーザークロウ』！」
「あぐ！？」
背後を見るとゼロムが唯に肘打を極め更に両腕の爪で切り裂いた姿だった。
「お前ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
即座に化け物にムラサメブレードを振り下ろすけど……
「馬鹿が。来るのが解る棒球はな簡単に打ち返せるんだよ。」
「がふ！？」
即座に蹴り倒されてしまう。
畜生……！僕の意識はそこで途絶えた。
……
第三者ＳＩＤＥ
「さて……と。ゼロムやったな？」
「はい。アンクさん。」

気絶した明久を脇に寄せながらアンクがゼロムを見やるとそこには大破した監視カメラと気絶した一夏と士郎、唯とモブキャラの騎士の姿があった。

「……やっぱり……気持ち良い物じゃありませんね……知り合いを騙すだなんて。」

「アホ。でなけりゃこっちがやられてた。」

「そうですね……「てめえら！」あ、忘れてましたね。」

「俺を散々無視しやがって……絶対にぶっ殺してやる！」

「やれるものならやってみやがれ。ゼロム、やってしまえ！」

「はい！『ゼロ』セットアップ！武装は『イェーガー』！リィン！『ユニゾン』！序でに……『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』作動！」

「はいです！『ユニゾンイン』！」

『了解、イェーガーセットアップ！』

次の瞬間ゼロムの体に黒い軽装の服が装備され更にその上にネイビーブルーの鎧。手には可変式のライフル『トルネディア』が装備される。

これがゼロムのデバイス『ライガーゼロ・改』の武装のバリエーションの一つ『イェーガー・スナイプ』である。

但し、リィンとユニゾンした為に若干銀色も掛かっているが。

「行きます！」

ゼロムはイェーガー特有のスピードで一瞬で宮崎の目の前に移動する。

「何！？」

「『チェシャ猫（チェシャ・キャット）』……『魔剣アンサラー』！」

ゼロムが神の卵の能力の一つを使い……

「『時よ止まれ』！」宮崎を切り捨てる前に宮崎が時間を止めその隙に後ろに回る。

「え！？何が……「『木金符：エレメンタルバースト』！」な！？ぐわ！？」

次の瞬間ゼロムは宮崎に一撃を食らわされる。

「ぐ！？くそ……！」

「……東方の能力か。」

その通りである。

宮崎が転生する際に手に入れたのは『東方キャラの全ての能力を使える程度』の能力でしかもある程度使い熟しているのだ。

が……

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ぐふ！？げはあ！？」

能力を使えなければ意味はない。

イェーガーは元々スピードで敵に急接近し手数で打ち倒す為接近すれば圧倒的にゼロムに有利なのだ。

因みにスナイプは可変式ライフルをイェーガーに装備しイェーガーの欠点である決定力不足を補う為に作られた武装である。

「これで終わりだ！『神剣フラガッハ』！」

ズバン！

一撃でゼロムが宮崎を切り裂く。

しかし……

「……体を両断されて生きてるってどんな能力何ですか？」

宮崎は生きていた。

「は！驚いたか！俺には『不老不死になる程度』の能力があるんだ！体が一片でも残ってりゃ復活すんだよ！」

宮崎はこれで終わりにしておけば良かった物をゼロムに『言ってはいけない事』を言ってしまった。

「俺にはカリムやシャッハ達を堕としてハーレムにするっつう夢があるんだ！お前なんかに……「黙れ……！」ひ！？」

ゼロムから……恐るべき殺気が発生していた。

……

ゼロムＳＩＤＥ

「俺にはカリムやシャッハ達を堕してハーレムにするっつう夢が……」

今この人は何と言った？

義母さんやシャッハ姉達を堕してハーレムにする？

「お前なんかに……「黙れ……！」ひ！？」

ああ、こいつには生かす価値がない……死刑だ……！

「ゼロ……武装変更……『パンツァー』！」

『！？り、了解！』

ゼロが一瞬躊躇した後僕の体を覆う鎧がネイビーブルーの鎧からモスグリーン色の鎧へ更に全身の至る所にミサイルポッドが背中には巨大なビーム砲『ハイブリットキャノン』が装備され更に手には巨大なガトリング砲『デストロイヤー』が装備され最後にミサイルポッドの上に更にミサイルポッド『クラスター』が装備される。

これがゼロの武装バリエーションの一つ『パンツァー・デストロイ』……

「さあ……死ねよ！」

「な、何だよ……何なんだよお前はぁ！？」

「僕のなあ……僕の本当の母さんはなあ！お前の様な最低な奴に姉さんもろともぼろ雑巾になるまで犯されて……！殺されたんだよぉぉぉぉぉ！」

そして僕はライガーゼロ・改を駆りその男を追い掛け回し……ゼロの餌にした。

そういえば殺す前に男は『何でだよ！？俺は……俺は最強のオリ主の筈だろ！？こんな場所で死ぬはずが無い！』とか言いながらゼロに食われた様な気がする。「死ね……死んでしまえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！『デストロイビッグバン』！」

僕の咆哮と共に全身中のミサイルとハイブリットキャノン、デストロイヤーが火を吹き一瞬で下衆野郎をこの世から一片も残さず消し去った。

「母さん……姉さん……僕は……僕は……！」
「ゼロム？おいゼロム！」
「ゼロムさん！？」
リィンとアンクさんの声を聞きながら僕の意識は途絶えた。

……

それから数分後。

起きた明久達は破壊された輸送車を見てコアメダル及びガイアメモリを奪取されたのを確認した後なのは達に連絡したのは言うまでも無い。

第三話～急襲と初殺しと重武装～（後書き）

如何でしたか？
因みにティアナはテンプレでチート転生者が諭したのではなく士郎が説得しそしてなのはとの暴走模擬戦の時に明久と一夏が諭しました。（因みにティアナをなのはの攻撃から守ったのは明久でそれが原因でティアナは明久に惚れました。）
次回『主人公勢力の紹介』次の空にドライブイグニッション！

主人公勢力とデバイス紹介（前書き）

今回は主人公勢力の紹介です

主人公勢力とデバイス紹介

ゼロム・グラシアム

年齢…十二歳

身長…１５３？

体重…５４？

容姿…瑠璃色の瞳に藤色の髪、男の娘

性別…男（明久曰く第三の性別『秀吉』の一人）

好意を持つ人間…カリム、キャロ、エリオ、フェイト、シャッハ、『ヨハネ（オリキャラ）』、『ペテロ（オリキャラ）』、『雪菜（オリキャラ）』、ヴィヴィオ、アラン、秦、アルテマ、アンク

嫌悪する人間…ハーレムを企む奴、チート転生者、人を人と思わない奴、機動六課を犯罪者集団と呼ぶ人間

レアスキル…『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』

魔力量…Ｂ＋

デバイス…ライガーゼロ・改

リィンフォース？

特異点…ゾイドの特異点及びリリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ

詳細
本作品の主人公。本来ならゾイドの世界に住んでいたが八歳の頃に転生者により実母と姉を殺され、恨みと共に二人が残したゾイド『ライガーゼロ・改』を駆り二人を殺した転生者を殺害した途端にミッドチルダに吹き飛ばされた。
その時に違法研究所で理不尽な目に遭っていた三人の実験体を救いだしそれ以来三人を幸せにするために犯罪者となる。なのは、はやて、フェイトの三人を相手にしても引けを取らない位の戦闘力と戦術眼を持つ少年であり本来は明るく優しい性格であるが犯罪者だった頃はその性格を押し殺し冷酷な性格になっていた。
最終的にフェイトに撃破され他の三人もろとも捕まるがフェイトに保護されその時にキャロやエリオと出会う。
フェイトがカリムに会った際にその才能に惹かれたカリムに養子に引き取られた。
ＪＳ事件の時に危うくチート転生者のレイスに殺害されそうになるが死神が救い出し世界の真実を言われた為死神の『転生者狩り』に参加した。

アラン・クアル

年齢…十七歳

身長…１７６？

体重…６８？

容姿…黒髪のポニーテール、オレンジの瞳、イケメン（本人自覚無し）

性別…男

好意を持つ人間…シエスタ、才人、ルイズ、ギーシュ、タバサ、キュルケ、秦、ゼロム、アルテマ、アンク

嫌悪する人間…チート転生者、貴族、威張りくさる奴、仲間に手を出す人間

レアスキル…英霊の憑依

能力…S＋（ゼロ魔基準にするとスクエアクラス）

デバイス…無し

特異点…ゼロの使い魔

詳細

ゼロの使い魔の世界の人間で暗殺者兼メイジだった。

父は貴族で遊びでアランの母（平民で美人だった）と交際した結果アランの母がアランを身籠ってしまい怖くなってアランの母を殺したがそれはアランが生まれた後だった。『土くれのフーケ』の事件の時に『オールドオスマン』の暗殺を引き受け『トリステイン魔法学院』に忍び込むがルイズとキュルケが才人に魔法を打ち込む姿を見つけつい才人を救ってしまい事件に巻き込まれる。

その際オールドオスマンを殺害しようとするが返り討ちにされオールドオスマンに依頼されてルイズ達の護衛をさせられる羽目になった。

母を貴族に殺されて以来『貴族は最低最悪の悪魔、いなくなった方が世間の為。』という考え方しか無かったがルイズ達との出会いでその考えが変わり貴族にも良い奴がいると解り改心する。

己の変わる切っ掛けとなったルイズと恋人になった。ルイズとの関係に嫉妬したチート転生者に殺害されたが死神が能力を授け死ぬ前に戻され転生者を返り討ちにした後死神の『転生者狩り』を手伝っている（時々ルイズ達と会う権利は貰っている）。
因みに魔法は独学である。

新垣秦

年齢…十六歳

身長…１８７？

体重…６１？

容姿…緑色の髪に深紅の瞳、中の上の顔

性別…男

好意を持つ人間…希、巧、乙女、文乃、千世、ゼロム、アラン、アルテマ、アンク

嫌悪する人間…チート転生者、仲間を大切にしない人間

レアスキル…召喚獣憑依、ピクミン召喚

魔力量…ＡＡＡ＋

デバイス…無し

特異点…迷い猫オーバーラン

詳細
迷い猫オーバーランの世界の人間。巧、乙女、文乃の幼なじみで良く『ストレイキャッツ』の手伝いをしていた。
両親は共働きでしかもあまり秦を気に掛けなかった為に中学生の頃から『自分は親に愛されていない』と考える様になり時々自殺狂とも言える行動を取るようにもなった為巧達を心配させていたが高校に入り巧達の日常に付き合わせられる様になってからは元の動物好きで優しい性格に戻った。
希の恋人で（しかも学園一のお似合いカップルとして有名だった）好きあっていたが関係に嫉妬した転生者に殺されそうになり寸前でアランがやってきて返り討ちにし事情を話した結果巧達に『秦の力が必要とされているならやってこい』と言われて送り出され死神の『転生者狩り』に参加した（アラン同様時々希達に会いに帰っている）。

アルテマ

年齢…???

身長…185?

体重…「普通女に聞くか?」

容姿…めだかボックスの『黒神めだか』の髪を紫のメッシュにしただけで後はまんま黒神めだか

性別…女

好意を持つ人間…アンク、メズール、カザリ、ウヴァ、ガメル、ゼ

ロム、アラン、秦

嫌悪する人間…チート転生者、己の仲間を罵倒する人間、人間を人間と思わぬ者、アイスを馬鹿にする人間

レアスキル…仮面ライダーオーズへの変身、『創造（クリエイト）』、『聖王の鎧』

デバイス…無し

魔力量…ＳＳＳ＋

特異点…不明

詳細

『本来』は有り得ない筈の『聖王・オリヴィエ』の実の姉。姉妹の為か聖王の鎧を扱える。

グリード達とは幼い頃に妹をも凌駕する魔力と『創造』でグリード達の栄養ともいえる『セルメダル』を精製した為『人間に害を与えない代わりにセルメダルを供給する』という条件で契約関係を結んでいたが次第にグリード達がアルテマの優しさ（ガメル＆メズール）や強さ（ギル、ウヴァ、アンク）、気高さ（カザリ）に惹かれ改心したため親友として接している。

王を決める際に危うく妹を支持する者達とアルテマを支持する者達が危うく戦争をしそうになるがアルテマがあっさり王位継承権を放棄したため回避された。

継承権を放棄したその日に仮面ライダーオーズとして妹のオリヴィエを支える為の闘いを開始した。

しかしチート転生者の『生き返って力を手に入れて薔薇色の人生を歩みたい』という欲望で発生した幻獣系グリード『オーディン』と闘い撃破するもののコアメダルを吸収させられてしまいオーディン

に憑依され妹と死闘を繰り広げたが最終的に意識を取り返し自ら封印された。
それ以来自分が妹と死闘を繰り広げる羽目になりそしてグリードになる事になったチート転生者達には深い恨みを持っている。
ゼロム達に封印を解かれた後チート転生者達が世界にはびこっているのを知り『転生者狩り』に参加している。
因みにアイス好きはアンクに影響された。

アンク

身長…１８７？

体重…５７？

容姿…原作と同じ

性別…男

レアスキル…無し

好意を持つ人間…ガメル、ウヴァ、メズール、カザリ、ギル、アルテマ、秦、アラン、ゼロム、映司、比奈、伊達

嫌悪する人間…チート転生者、アイスを馬鹿にする人間、仲間を罵倒する人間、努力をしない人間

デバイス…焔

魔力量…ＳＳ＋

特異点…仮面ライダーオーズ

詳細

仮面ライダーオーズの世界からきたグリード。他の仲間と共に古代ベルカの世界に住んでいたが生きる為に仕方なくヤミーを作り出していたがアルテマを襲撃しセルメダルを埋め込もうとするもグリード全員が返り討ちにあい何故人に害をなすかを吐かされる羽目になった。

そしてアルテマの項で紹介したとおりその後アルテマの能力でセルメダルを供給する代わりに人間に害を与えない事を誓った。

そしてアルテマが『火野映司』と同じくらいの強さや欲望の少なさに驚くも彼女の弱さや優しさに惹かれ彼女に心服した。

アルテマが仮面ライダーオーズとして戦い始めた時に貰った槍『焔』はストレージデバイスと同じで炎を操る事により多彩な攻撃を繰り出す事ができる。

そしてオーディンとの闘いの後にオーディンに憑依されたアルテマに操られオリヴィエを襲撃したがチート転生者により倒された（その際に転生者からオーディンと同じ匂いがしたため転生者がオーディンを生み出したのだと確信した。）

アルテマから封印を解かれた際に転生者が活躍しているのを知り『転生者狩り』に参加している。

リィンフォース？

年齢…六歳

身長…１４３？（本人は、１４５と言い張っている）

体重…アルテマに殴られた為に計測不能（人の所為にするな）

容姿…リィンフォースアインを全体的に幼くした感じ

性別…女

好意を持つ人間…はやて、リィンⅠ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、ゼロム、アラン、秦、アンク、アルテマ

嫌悪する人間…チート転生者、機動六課を犯罪者集団と言う人間

レアスキル…ユニゾンイン、???（まだ不明）

魔力量…B＋

デバイス…無し

詳細

ゼロムのユニゾンデバイスで『闇の書』管制プログラムリィンフォースアインの妹分。

ゼロムの過去を知ったアインが（知った理由はゼロムが寝言で『母さん……姉さん……』と涙を流しながら言っていたからである因みにフェイトとカリム以外誰にも話していない）哀れみや優しさを込めて作り出した為ゼロムにとってはゼロに継いで頼れる相棒となった。

チート転生者のレイスに危うくゼロムもろとも殺されそうになるが死神がゼロムを助けだした時に付いてきて『転生者狩り』に参加している。

キャロや雪菜、ヴィヴィオとはゼロムを巡る恋のライバルである。

デバイス紹介

『ライガーゼロ・改』
ゼロムの実母が中破していたライガーゼロを改造したもの様々な場所に武装や装甲が追加されており多彩なオプションパーツを駆使する事で相手を倒す事を主軸にする戦い方を得意とする。

『素体』
全てのオプションパーツを取り外している姿、デバイス形態では黒い服。
ライガーゼロ・改の基本形態。
全てのオプションパーツが無いため装甲が薄く運動性能しか取り柄が無いという残念な機体であったが主兵装『ストライクレーザークロウ』を強化し更に口の中に『荷電粒子砲』（デバイス形態では背中にマウントしている）を装備し更にレーザーファングを『コードギアス』の兵器『輻射波動』（デバイス形態では刀）に変更したため素体だけでも小型ゾイドの中隊を殲滅できる戦闘能力を手に入れた。
武装
『ストライクレーザークロウ』…四
『荷電粒子砲』…一
『輻射波動刀』…一

『タイプゼロ・改』
ゼロに白の基本オプションパーツを装備した姿、デバイス形態では白い鎧。
特徴としてイオンターボブースターを四つに増やし更に両肩のショックカノンは山をも貫く威力となっており、輻射波動や荷電粒子砲も装備されている為中型ゾイドでも弱い者なら無傷で完勝できる。
武装
ストライクレーザークロウ…四

ショックカノン…二
輻射波動刀…一
荷電粒子砲…一

イエーガー・改『スナイプ』
ゼロに高機動戦闘用のオプションパーツを装備した姿、デバイス形態ではネイビーブルーの鎧。
ゼロの高機動戦闘用及び遠距離狙撃戦闘用装備

特徴として大型イオンブースターの数を四つに増え更にサイドスラスターの数も四つに増えているため小回りや機動力を極限な迄に追及したと思われがちな形態だがバルカンポッドやフライングバルカンポッド等の武装の数が八つに増える等武装の面も強化されており高機動戦闘においては無類の強さをほこっていたがゼロムの実母曰く『決定力が足りない！』と言ったため可変式ライフル『トルネディア』を装備する等している。
武装
バルカンポッド…八
フライングバルカンポッド…八
輻射波動刀…一
荷電粒子砲…一
ストライクレーザークロウ…四
可変式ライフル『トルネディア』…一

『トルネディア』について
トルネディアには『ライフルモード』、『ガトリングモード』、『ミサイルモード』、『ランチャーモード』の四つの形態があり
『ライフルモード』は狙撃戦用に開発されたモードでこのモードを使用している間はコックピットにターゲットサイト（デバイス形態は普通にライフルにターゲットスコープが現れる）が出現し操縦者

に敵との距離を伝える音声サポート機能も搭載されている。
『ガトリングモード』は多対一用に開発されたモードで毎秒七百発ものビーム弾を吐き出す形態で高機動戦闘を得意とするゾイドや高機動戦闘を得意とする魔導士にとっては天敵とも取れる形態。
『ミサイルモード』は空中戦闘を得意とする敵用に開発されたモードで単発しか射てない代わりに分散させたり誘導機能を追加したり着弾した瞬間に拡散して他の敵に攻撃したりと攻撃バリエーションが豊富な形態である。
『ランチャーモード』は一撃必殺を心掛けた形態で最後の切り札的なモード、極限迄に収束したビームを放つもので大型ゾイドを擦っただけで消し飛ばすが放った後は冷却やトルネディアが爆発する危険もあるためイエーガーが強制パージされるのが難点の形態である。

シュナイダー・改『バースト』
ゼロに格闘戦用のオプションパーツを装備した姿、デバイス形態ではオレンジ色の鎧を装備する。
ゼロの格闘戦用装備で『パンツァー・デストロイ』に次ぐエネルギー消費量をほこっているがその分短期決戦用に作られたオプションパーツの為一撃の威力は『パンツァー・デストロイ』に勝とも劣らない。
特徴として遠距離戦闘を得意とする敵に対し互角の戦いをできる様に七本の『ブレードビット』に銃口を付けそこからビームを装備出来るようにした。
更に牙に搭載されている『輻射波動』をブレードビットに纏わせる事でどんな堅い鉱物をも両断する刃となったが輻射波動事態エネルギー消費量の激しい武装の為扱い方が難しい形態でもある。

武装
ストライクレーザークロウ…四
ブレードビット・改…七

荷電粒子砲…一
輻射波動刀…一
『輻射波動剣』…七

パンツァー・改『デストロイ』
ゼロに砲撃戦闘用のオプションパーツを装備した姿、デバイス形態ではモスグリーン色の鎧。
ゼロの砲撃戦闘用の武装で元となった機体のオプションパーツも『歩く事すらままならない欠陥装備』と言われていたにも関わらず更に武装を追加したため最早歩く事が出来ずしかも柔らかい場所だと最悪沈むという重量だったがデバイス形態ではそれが若干改善され動く事はできる（但し走る、飛ぶという行動は出来ない）。

特徴として背中のビーム砲『ハイブリットキャノン』は高層ビル郡を軽く三つは蒸発させる威力を持ち全身中にあるミサイルポッドの上に拡散ミサイルを搭載した『クラスター』を装備し更に実弾とビーム弾を使い分ける事ができるガトリング砲『デストロイヤー』を装備しているため此等の火器を一斉発射したら艦隊三つを丸ごと消し飛ばす。

武装
ストライクレーザークロウ…四
ハイブリットキャノン…二
ミサイルポッド…十六
拡散ミサイル『クラスター』…十六
大型多目的ガトリング砲『デストロイヤー』…二

主人公勢力とデバイス紹介（後書き）

如何でしたか？
次回は、唯、一夏、明久、士郎のトリップ四人組の仲間がやってきます。
次回『聖王教会での再開』
次の空にドライブイグニッション！

第四話～聖王教会での再開のち暴行のち予言～（前書き）

トリップ組のが仲間来ます。

第四話～聖王教会での再開のち暴行のち予言～

カリムＳＩＤＥ

「なんと……なんという……」

私『カリム・グラシアム』はついさっき出た予言に驚愕と悲しみを隠せなかった。

「『ゼロム』……貴方は……何て不運で……悲しい運命を歩のですか……！」

私は予言を読み返しながら私の義理の息子『ゼロム・グラシアム』を思い胸が張り裂けそうだった。

バン！

「大変です、騎士カリム！」

更に悲しみを感じるより先にシスターでそしてゼロムとは姉弟の様に親しかった『シャッハ・ヌエラ』が慌てた様子で扉を開けながら出てきた。

「何が大変なのですか？シスターシャッハ。」

「いや……その……吉井明久と衛宮士郎と平沢唯と織斑一夏の四人の友人が来たのですが……」

何故か言いにくそうにシャッハが言葉を濁らせる。

「？それなら良かったではないですか。それで何故大変なのですか？」

吉井さんも平沢さんも衛宮さんも織斑さんも自分の世界（しかも管理局はまだ四人の世界を発見していない）の人間が来れば安心出来

ますし。

「え、ええと……口では言いにくいので兎に角来て下さい！」
シスターシャッハが修道服を翻しながら広間の方向へと走っていく。
唯事では無いと解った私はその背中に着いていった。

……

広間に向かう廊下に入った私とシスターシャッハを出迎えたのは……

「痛い痛い痛い！指はそっちに曲がらない！」

「ほうそうか。では、君が吉井にしたのはいけない事になるな。」

「アーチャー、そいつの指の関節外しても構わないわよ。」

「解った『燐』。」

「待て、この不埒者！」
「逃がしません！成敗します！」

「ま、待ってください！真剣を持って追ってこないでください！」

「黙れ！吉井に恋人が出来てる位でぼこぼこにする貴様に拒否権はない！そこになおれ！」
「上に同じです！観念しなさい！」

「嫌です！」

「待てこらーーーー！」
「絶対に逃がさないんだから！」

「逃すか！」
「逃しませんわよ！」
「……待てと言われて待つ奴はいない！」
衛宮さんに似た男性と黒髪をツインテールにした女性が吉井さんと同じ制服を着たポニーテールの少女の指の関節を曲げており織斑さんと同じ制服を着た黒髪をポニーテールにした少女と金髪で騎士の鎧を着た女性が吉井さんと同じ制服を着たピンクの髪の少女を刀と騎士剣を持って追い掛け回し更に吉井さんと同じ制服を着た青い髪の少年が織斑さんと同じ制服を着た金髪にショートの少女とツインテールの少女と銀髪のストレートの少女と金髪のストレートの少女が追い掛け回していた。
「シスターシャッハ……」
「何ですか騎士カリム……」
「何故このような状況に？」
「……吉井の様子を見に行きましょう。」
何故か誤魔化すシスターシャッハだった。
……
広間に入った私とシスターシャッハを出迎えたのは……
「明久！しっかりしろ！」
「明久！しっかりして！」
首と背骨以外の色んな部分の関節があり得ない方向に曲がっており着ている制服もボロボロになって倒れている吉井さんとそれを揺す

っている織斑さんとティアナさん。

「お前酷い奴だな！吉井があんなになるの解って言ったろ！」

「だ、だからといって何故お前や周りの奴にリンチを食らわなきゃいけないん……」

「問答無用！」

「ギャアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

吉井さんと同じ制服を着た赤い髪の少年が平沢さんと同じ制服を着たカチューシャを着けた少女の号令の下様々な人間にぼこぼこにされる。

「……シスターシャッハ……」

「何ですか？」

「廊下側の人達を止めてきて下さい。」

「解りました。」

と、言ってシスターシャッハは出ていった。

さてと……

「止めなさい！『アクセルシューター』！」

私はゼロムが違法研究所から救い出した三人の少年少女の内の一人が作ったデバイスで赤い髪の少年をぼこぼこにしていた子達の足下に牽制の一撃を放つ。

「何するんですか！」

「今は貴方達の事を知りたいので喧嘩は後にして下さい！止めなければ次は当てます！」
取り敢えず全員を落ち着かせる為にさっきのは牽制の一撃だという事を教える。

「む～～～……解ったよ。」
カチューシャを着けた少女が残念そうな顔でその場に座る。
それに釣られ他のメンバーも座っていった。

……

第三者ＳＩＤＥ

「取り敢えず貴方達の名前を教えて欲しいのですが……」
あの後暴れていたメンバー全員がシャッハとカリムから説教を食らった後暴れていたメンバーは自己紹介を求められる。

「あ、はい。私は士郎の仲間で『セイバー』と申します。」
と、騎士の鎧を着込み下には青いドレスを着た女性。

「私は士郎の魔術の師匠の『遠坂燐』よ。」
と、黒髪のツインテールの少女。
因みに明久が『あ、貴方が『うっかり』遠坂さんですか。』と言った瞬間燐から右ストレートが飛んできたのは言うまでもない。

「私は『アーチャー』という。衛宮士郎の仲間だ。」
と、何処と無く士郎に似ている青年。

「『姫路瑞樹』です。明久君とは友人です。宜しくお願いします。」
と、ピンクの髪の巨乳の少女。

「ウチは『島田美波』です。趣味はアキをぼこぼこにする事です。」
と、ポニーテールの少女。
因みにそれを聞いて燐とは違うツインテールの少女と島田とは違うポニーテールの少女が明久を島田の隣から避難させたのは言うまでもない。

「『坂本雄二』だ。一応この馬鹿のクラスの代表をやっている。」
と、赤い髪の少年。
因みに明久が『何だと馬鹿雄二！』と、言って雄二と殴り合いになったのは『バカとテストと召喚獣』では当然の流れである。

「……土屋康太。」
と、青い髪の無口な少年。
「「あだ名は『寡黙なる性識者（ムッツリーニ）』です（だ）。」」
と、言われると土屋康太改めムッツリーニが瞬時に首を振って否定するが金髪のショートの少女と金髪のストレートの少女がムッツリーニの隣から引いたのは言うまでもない。

「木下秀吉じゃ。特技は『声帯模写』と『演技』じゃ。」
と、男の娘の少年。
因みに『』は声帯模写の部分は燐の声、演技の部分はカリムの声である。

「……『霧島翔子』雄二の妻。」
と、黒髪のストレートの少女。
因みに『雄二の妻』の部分で大半のメンバーが雄二からドン引きし雄二が『違う！俺はまだ婿入りする気も結婚する気も無い！』と言うと安心して帰ってきた。

「『篠ノ乃箒』です。一夏とは幼なじみです。」
と、島田とは違うポニーテールの少女。

「『鳳鈴音』です。一夏とは箒と同じ幼なじみです。」
と、燐とは違うツインテールの少女。

「『ラウラ・ボーディッヒ』だ。一夏は私の嫁だから手を出すなよ？」
と、銀髪のストレートの少女。
因みに『誰だそんな日本語教えたの出てきなさい。』とその場にいる全日本人が思ったのは言うまでもない。
「『シャルロット・デュノア』です。一夏がお世話になりました。」
と、金髪のショートの少女。

「『セシリア・オルコット』ですわ。宜しくお願いしますわ。」
と、金髪のストレートの少女。

「『更識盾無』です。一夏君がお世話になりました。」
と、水色の髪の少女。

「……『更識簪』。織斑君がお世話になりました。」
と、眼鏡をかけた水色の髪の少女。

「一夏の姉の『織斑千冬』だ。愚弟が世話になった。」
と、黒髪のストレートの女性。
因みに愚弟の部分で一夏が『ひでえよ千冬姉！』と言ったが無視された。

「『田井中律』だよ。唯とは同じ部活のメンバー宜しくな～～。」
と、カチューシャを着けた少女。

「『琴吹袖』です。律ちゃんや唯ちゃんと同じ部活です。」
と、髪と眉毛が金髪の少女。

「『秋山澪』です。律や袖、唯とは同じ部活です。」
と、黒髪のストレートの少女。

「そうですか。では、何故アーチャーさんが島田さんの指の関節を曲げ、姫路さんをセイバーさんと篠ノ乃さんが追い掛け回していたのですか？」
と、カリムはさっきから気になっていた事を聞く。

「ふむ……言うならば二人の『嫉妬』だな。」
と、アーチャー。

「？どういう事ですか？」

「え～と、ティアナと明久が親しく話してたんだよ……」
と、一夏。

「それで変な渦（時空の歪み）に飲み込まれた僕達と……」
と、シャルロット。

「私達が唯や織斑君と合流して……」
と、律。

「燐の『うっかり』で我々や……」

「遠坂、また失敗したのか？」

「五月蝿いわね！『バキッ！』」

「ギャフ！？グーで殴るな！グーで！」

「ババア（文月学園の学園長）の実験の応用で俺達がやってきたんだ。」

と、雄二。

「それで、島田と姫路がいち早く明久を見つけてのう……」

と、秀吉。

「二人が吉井の両腕を掴んで関節を外した。」

と、千冬。

「当たり前でしょ！」

「明久君……よく考えたらその女の子……ダレデスカ？」

島田がアーチャーと千冬からの冷たい視線に反論し姫路がティアナの傍にいる明久に殺気を出しながら質問する。

「え？……恋人だけど……」

「「嘘ね（ですね）。」」

「「「「何でえ（何でだ）（何でさ）（何でですか）！？」」」」

明久が真実を言ったがまるで二人は信じずその場にいる全員が突っ込む。

「だってアキに恋人が出来るわけ無いじゃない。（ウチや瑞樹が色んなアプローチしたにも関わらずね！）」

「そうです。明久君を好きな人は出来ても告白は出来ません。（絶対に有り得ません！）」

「往生際が悪いな二人とも。吉井明久とこの少女……「ティアナ・ランスターよ。」ああ、済まない。ティアナが付き合っているのは明白だ。何故なら吉井明久と親しく話していたり君達二人に怒ったりしているのだからな。」

「違います！只の親しい人の気づかいです！」

「そうよ！そうに決まってるわ！」

アーチャーの冷静な判断に二人は噛み付く。

「はあ……明久、ティアナ『あれ』見せてやれ。」

「「「『あれ』？」」」

士郎の言葉に事情を知らない者達全員が疑問の声を上げる。

「う、うん……／／／」

「これ……／／／」

二人が顔を真っ赤にしながら出したのは……

「『Ｆｒｏｍ明久ｔｏティアナ』と『Ｆｒｏｍティアナｔｏ明久』

……婚約指輪……だと……？」

アーチャーがそれにいち早く気付き茫然となる。

「「「「……はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」」

カリムやシャッハも交えた全員（士郎、明久、ティアナ除く）が驚

愕の声を上げた……

……

「ぜえ……ぜえ……と、取り敢えず今はそんな話をしている場合ではありません。」

明久&ティアナショックとも言うべき激震からいち早く目覚めたカリムが肩で息をしながら自分の要件を思い出して言った。

「……何かあったんですか？」

その言葉から士郎が要件を聞く。

「予言が出ました。八神さん達に連絡して下さい。」

「「「「「「！」」」」」」

カリムの言葉を聞き士郎、明久、唯、一夏、シャッハ、ティアナの六人の顔が真剣な表情へと変わる。

「おいおい……明久、お前またなんか厄介ごと「雄二は黙ってて。」！？お、応……」

何かを言おうとした雄二を明久が無言の殺気で黙らせる。

「解りました。はやて部隊長達には私が連絡しておきます。」

「一夏……戦いになるようだったら手を貸すが？」

「良いよ、箒これは俺や皆がやらなきゃいけない事だから。」

一夏を心配している箒に一夏がやんわりと断る。

「お、おい唯……？」

「大丈夫だよ、りっちゃん。私は戦わなきゃいけないから。」

唯を心配している律に自分の役目と言う唯。

「ふむ……これは面倒な事になるな。」

「そうだよ、アーチャー。」

士郎がアーチャーにこれは面倒な事になると告げる。

そして聖王教会において死闘が始まるカウントダウンも始まった……

第四話～聖王教会での再開のち暴行のち予言～（後書き）

如何でしたか？
次回『予言と聖王と過去の記憶』
次の空にドライブイグニッション！

第五話～聖王と過去の記憶～（前書き）

サブタイトル変更しました。
今回はアルテマの過去が解ります。

第五話～聖王と過去の記憶～

ゼロムＳＩＤＥ

「う……ん……あれ？此処は……」
僕は恐らくパンツァーの必殺技『デストロイビッグバン』を周囲や魔力に配慮する事無く全力で使った反動で気絶したんだけど……

「何で僕は『エーデル・シュワイス城』に入るんだろう？」
僕はかつて聖王『オリヴィエ』が住んでいた城の中にいた。

『お姉様～～～何処～～？』

「あれは……『ヴィヴィオ』？」
僕は（多分）なのはさんの養女になったであろう聖王『オリヴィエ』のクローンを思い浮かべたけど直ぐに却下した。
何故なら……

「ヴィヴィオには……姉何ていない。」
僕はあの少女が誰だか知りたくなりその背中を追い始めた。

『あ、お姉様～～～。』
追跡を始めて１０分漸く目的の人物を見つけたらしい少女が城を出て庭に入り僕も釣られて庭に入ると……
そこには……ボロボロになったアンクさんと紫色の体の恐竜の様な生物と青い体の魚の様な生物と黄色い体の猫の様な生物と緑色の体の虫の様な生物と白い体の象の様な生物が壁ぎわに積みあがっていた。

「（何この状況ーーーー！？）」
僕は心の中で突っ込みを入れた。

『お姉様……な、何が起きてこの状況なの？』
『ん？ああ、『オリヴィエ』か……散歩に出てたらいきなり襲い掛かってきてなつい迎撃してしまったのだ。』
……オリ……ヴィエ？
何で聖王……が？
それにこの声って……

『お姉様凄〜〜〜〜い！』

『あのなあ……私は凄くない。お前に比べて欲はある、重臣どもは私を後継ぎにしたい様だが私は拒否してる。欲が無いと立派な王になれんからな。だから……お前を聖王にしたい。押しつけると言われればそれまでだがな。』
振り向いて聖王を撫でた女性は……

「『アルテマ』さん……？」
僕等と共に闘っている幻獣系グリードの女性アルテマさんだった。
そこで僕の意識はまた途切れた。

……

「う……ん……此処は……」
うん、エーデル・シュワイス城の中だな。

『父様、話があります。』
！？アルテマさんの声！

『ん？何だね、アルテマ。』

『私から聖王の継承権を剥奪して下さい。』

え！？

『……理由を聞こう。』

『最近アンクや『ウヴァ』から私かオリヴィエどちらを聖王にするかで重臣達が激論を繰り広げていると聞いています。このままでは内乱を引き起こしかねません。だからこそ私が聖王の後継者では無くなればその危機を未然に防げます。』

アルテマさん……

『……しかしお前には何の罪も無い。幾らお前から言われたと言っても重臣達が納得せん。』

そういえばそうだ……このままじゃ……！

『いいえ、それならご安心を既に私は私を推していた重臣の一人を斬っておりますゆえ。』

……はい？

『……はあ、お前は何ともまあ破天荒な事をする。』

『ふふふ……母上に似たのですよ。』

『それはそうか。明朝、お前を廃嫡にしよう。』

『すみません、私の我が儘に巻き込んでしまって。』

『良い、それはそうとお前はこれからどうする気だ？』

え～と……確か……欲望の王がした事は……

『ああ、私を推していた重臣達は私を奉って父上に反旗を翻そうとするでしょう。私を推している連中です。私が『掃除』をします。その後は……まあ旅でもしますよ。』

そうだ、自分を推していた重臣達を全滅させた後行方不明になるんだ。

『……すまない。』

『いいえ、これも妹と父上そして民の平穏の為、私はその礎を作る為に生け贄となりましょう。』

アルテマさん……貴女は何て悲しい決意を固めてるんですか……

そして僕の意識は途切れた。

……

目を覚ました僕の目の前には目に涙をためたリィンがいた。

「リィン……」

「どうして……！どうしてリィンに心配ばかり掛けるんですか！」

僕は開口一番に怒られたが自業自得の部分もあるので大人しく聞いておく。

「リィンは、ゼロムさんのユニゾンデバイスです！お姉ちゃんやはやてちゃんからは『ゼロムを頼む』って頼まれました！なのに……何で無茶ばかりするんですか！」

「……ごめん。」
これは僕の真の気持ちだ。
リィンやアンクさんに迷惑を掛けたし皆にも心配を掛けたんだ怒られて当然だろう。

「なら……心配させないって意味を込めてリィンに『キス』して下さい。」
え？えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？

「いや、その、あの……いきなりすぎ……」
『ならもう私にもリィンさんにも心配掛けさせないで下さい。』
ゼロ……

『マスターはいつもそうです。『フヨウ』様や『ユキ』様が殺害された時はまだゾイドだった私が心配するくらい睡眠しませんでしたし『ＪＳ事件』の時も皆さんと共に訓練したりしているのになのはさんとティアナさんの暴走模擬戦の原因となった訓練にまで参加して……マスターは休まなすぎです。』
デバイスにまで怒られるって……

「ゼロムさん……」
「え！？」
何時の間にかリィンが僕の目の前にいた。
……子供モードで。

「リィン……まさか……」
「はい。リィンとこの状態でキスして下さい。」

「やっぱり……」
何となく嫌な予感はしたんだ。

「リィンはもう嫌なんです。ゼロムさんに相棒じゃなくて一人の女の子として見てもらいたいんです。」
リィン……？

「だから……だから……」

「あ～～～～いい加減にしてくれ甘い展開にアンクがノックアウトされてるんだ。」
「「うわあ（きゃあ）！？」」
あ、アルテマさん！？

『ウボロロロロ……あんな欲望、死んでもごめんだ……』

『アンク、しっかりして。』

『お前、あんなの甘いの内に入らないぜ？俺の世界ではバカップル（才人＆シエスタ）が一本のマフラーでぬくぬく……言葉でもダメなのか？』

『みたいだ……ウゲぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……』
……何かごめんなさい。

「……っ！」
頭の片隅が痛む。
これって……！

「義母さんの予言が出たね……」

「？何で解るんだ？」

「僕が前に犯罪者だった時に一度義母さんを襲撃したんです。その時から何故か義母さんの予言が出ると頭の片隅が痛くなるんです。」
「ふむ……恐らくお前の希少能力（レアスキル）『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』の影響だろうな。自覚はしてなくても発現はしていたわけだ。」
つまりこの痛みは希少能力による能力吸収の痛みか。
「多分予言ではアルテマさんや僕の事が書いてあると思います。」
「ほう。ならその予言を盗み見てやる。」
「え？行くんですか？」
「ああ、但しお前は置いていくがな。」
「何でえ！？」
義母さん達に無事を伝えたいのに！
「アホかお前は体の全魔力を武装の技一発で枯渇させた奴が何を言う。それに、まだお前は本調子じゃないだろう？」
う……ばれたか……
「ま、いざというときは来ても良いぞ？お前の希少能力はどうやら『帽子屋（マッドハッター）』と『チェシャ猫（チェシャキャット）』以外はあんまり魔力消費しないみたいだしな。」
へ～～～～。
「ま、行って来る。」
そういってアルテマさんは出ていった。

……あれ？そういえば此処何処？

「『クラナガン』の『ホテルアグスタ』知ってるでしょ？」
と、秦さん。

「知ってるも何も訪れた事ありますよ！？」
吉井さんとティアナさんが付き合うきっかけになった場所だ、忘れるわけが無い。

「てか、何で『アルナ』に帰らないんですか？」

「ああ、お前の目覚めを待つのが一つ、もう一つは『機動六課にいる聖王のクローン』にアルテマが会いたがったからだ。」
と、アランさん。

「……え？ヴィヴィオに？」
聖王のクローンといえば彼女しか思い浮かばない。

「ああ、アルテマ曰く『妹のクローンなら私の姪と同じだ。』らしい。」
と、アンクさん。

「……何だか大騒動に発展しそうですけど？」

「そう言うな。何なら『三月兎（マーチ・ヘア）』で様子を映したらどうだ？」
あ、そっか。

「解りました。三月兎起動。」
三月兎の固有能力『バロールの魔眼』が発動されホログラム映像が会議の様子を映し出した……

続く……

第五話～聖王と過去の記憶～（後書き）

如何でしたか？
次回は予言の内容とアルテマが機動六課の面々に姿を晒します。
次回『予言と憑依と忌まわしき過去』
次の空にドライブイグニッション！

第六話～予言と憑依と忌まわしき過去～（前書き）

今回は戦闘はありません。

第六話～予言と憑依と忌まわしき過去～

ゼロムＳＩＤＥ

（恐らく）聖王教会に集まっていたのはなのはさんやキャロ達機動六課のメンバー、義母さんやシャッハ姉や吉井さん達……あれ？

「あれ？吉井さんや織斑さん達と同じ制服を着た人間増えている様な……？」

「大方吉井や織斑って奴等の世界から吹っ飛ばされて来たんだろ。」

と、アンクさん。

成る程。

『美波ちゃん、どうしたんですか？さっきからキョロキョロして。』

『あ、うん……何かさっきから見られてる様な気がして……』

そう言いながら三月兎（マーチ・ヘア）で会議の様子を映してる辺りを見る美波と呼ばれているポニーテールの女性。

「う～ん……勘が鋭いのかな？」

ヨハネやペテロ、雪菜も違法研究所で研究されていた為か妙に勘が鋭かったがこの人は天性の様だ。

「はあ、才能があるって良いなあ……」

僕の魔力量はＢ＋という低さだしレアスキルだって使い勝手が良いものが揃っているがまるで使い熟せない……欝だ。

「ゼロム！今は集中しろ！」

「と、ごめんなさい！」

そうだ今は会議に集中しなくちゃ。

『カリム、今回は皆を呼んだっちゅう事は……』

『はい。予言が出ました。』

八神部隊長の言葉に義母さんが速攻で答える。

やっぱりね……

『ところでゼロム君はこの事知ってるのかな？』

『恐らくは知りません。ですがキャロさんの情報ではあの子はレアスキルを持っているそうですから予言の事を知っていてもおかしくはありません。』

吉井さんの言葉にも同様に義母さんは答える。

義母さん大正解だよ。

頭痛の事は義母さんやシャッハ姉が心配するといけないから言わなかったけど言わなくて正解だったかもしれない。

『……さっきから予言と言っているがどういう事だ？』

と、どことなく織斑さんに似ている黒髪のストレートの女性。

『ああ、千冬姉には言って無かったっけ。カリムさんはレアスキル……ＩＳ（インフィニット・ストラトス）で言うところの単一仕様（ワンオフアビリティ）を持ってて時々予言が出るんだ。』

『ふむ……そうか。』

と、言って千冬さんは黙る。

『今回出た予言の内容はこれです。』

と、言って義母さんが八神部隊長に紙を渡す。

『え～と……『白き獅子、死神に魅入られ世界の真実を知りし時、虚無を愛せし暗殺者と迷い猫を愛せし青年、夜天の管理者の妹と共にミッドチルダに舞い戻り因果の鎖をねじ曲げし者達に反逆の御旗を建て欲望の王達に出会う。欲望の王が過去を知りたくば聖王を継ぎし者の記憶を覗け』……何のこっちゃ？』

『え～と……『白き獅子』と『夜天の管理者の妹』はゼロムとリィンフォース？の事ですね。』
と、シャッハ姉。
まあ当然だよね。

『だけどよその後の『世界の真実』って何だ？』
と、ヴィータさん。

『解らない事だらけだな……』
と、シグナムさん。

『でも最後の『欲望の王が過去を知りたくば聖王を継ぎし者の記憶を覗け』って部分は……』

『ヴィヴィオちゃんが入れば解決しますね。』
と、平沢さんの言葉をエリオが引き継ぐ。

『じゃあそのヴィヴィオって奴を……『雄二の膝の上にちょこんと座ってる女の子がヴィヴィオだよ？』何い！？』
何時の間にか雄二さんと呼ばれた人の膝の上にヴィヴィオがちょこんと座っていた。

『ヴィヴィオ！？何でその人の膝の上に座ってるの！？』
『羨ましい……！』

なのはさんと黒髪を腰まで伸ばした『クールビューティー』が似合う女性が口々に言う。
……黒髪の女性は雄二さんに凄い殺気を放ってたけど。

『え？広いから～～～！』
『……まあそれ位なら許してやる。』
ヴィヴィオが理由を言うと雄二さんは『仕方ないな』という表情になる。子供好きなのかな？

『でも記憶を覗くのって……』
『やっぱりあのマッドサイエンティストに頼まなきゃ駄目なのか？』
『プレシアさんでも良いような気が……』
『無理だよ。私の専門分野は魔力を使って動く動力機関等の開発。そういうのはあいつの分野だよ。』
と、吉井さん、衛宮さん、平沢さん、プレシアさんの順で言う。
『あのマッドサイエンティスト』って……まさか！？

数十分後……

『良いか『ジェイル・スカリエッティ』のくそ野郎。ヴィヴィオにちょっとでも変な事してみろ？その瞬間貴様の胴と首を泣き別れにしてやる。』

『衛宮士郎君……君は相変わらず私を嫌ってるらしいな。』

『当然だよ！』
『ヴィヴィオを犯罪に利用したあなたはまだ私達の中では危険人物なんだから！』
『レイスがまだ情状酌量の余地があるって言っただけでも怪しいのにこの上んな図々しい事を言うかてめえは！』

衛宮さん、吉井さん、平沢さん、織斑さんの順で罵倒された科学者は『ジェイル・スカリエッティ』……『ＪＳ事件』の首謀者だ。

「何で……どうしてこいつが！」
こいつの……！こいつの所為でヴィヴィオは『聖王のゆりかご』の起動キーにされたんだ！

「落ち着け、ゼロム！取り乱すな！」
「うるさい黙れ！」
宥めるアランさんについ怒鳴ってしまう。

「落ちいて。今は偵察が先だから。」
「むぐ……」
僕は秦さんの正論で黙らされてしまう。

「……解りましたよ。」
「てかおめえこの女の子好きなのか？」
と、アランさん。

「え？友達ですけど？」
時々雪菜やキャロ、リィンと喧嘩してたけど。

「……お前あの馬鹿（才人）並の鈍感だな。」
「？？？」
訳が分からない。

「取り敢えず映像。」
と、秦さん。
おっと集中しなくちゃ。

『それでは映すぞ。』
『ヴィヴィオ、痛かったりしたら直ぐに言えよ。』
『うん。』
衛宮さん……疑い過ぎですよ……と言いたいとこだけどスカリエッティについてはそんな言葉言わないけど。

そして出てきた映像は……
『これは……『エーデル・シュワイス城』？』
そう聖王オリヴィエの居城にしてアルテマさんの故郷だった。

『あ、誰か来た。』

［聖王様、アルテマ様がご帰還になられました。］

［そう……通して上げて。］

［はい。］
そうして近従と思しき少年に連れられてやってきたのはアルテマさんだった。

［久々だなオリヴィエ。］
［はい、ちょうど一年ぶりです。アルテマ姉様。］

『えぇぇぇぇぇ！？』
『聖王ってお姉さんがいたの！？』

『……何でこの世界の女の人（キャロとヴィヴィオ除く）って胸がデカいのかしら……？』
『み、美波ちゃん！？顔が怖いですよ！？』
なのはさんとフェイトさんが思わぬ事実に驚き美波さんから黒い闇

が吹き出す。

「うは、良い欲望。」

「埋め込まないか？」

「何でアーベ風味なんだよ。」

「知らないよ。」

その後ろでアンクさんと秦さんが漫才をしていた。

［此処は何時来ても変わらないな。］

［本当、姉様は屋上で夕日とかを見るのが好きでしたね。］

［ああ……］

そうこうしている内にアルテマさんと聖王が屋上に上がって話していた。

［なあ、オリヴィエ。単刀直入に聞く。］

［何ですか？］

［もしもお前がいきなり事故死んでそこに神様がいて『お前の事故は偶然起きたものだからチートな能力付きで生き返らせてやる』って言われたら信じるか？］

［……は？姉様、質問の意図が解りませんが？］

［それはそうか。私はなそいつらを見たんだよ。そして知った。そいつらは世界の因果をねじ曲げ世界からの拒絶を無視し世界のルールを平気で壊す最低な害虫だとね。］

［！？貴方何者ですか！何故姉様の姿を偽り……［違うね。僕はこの女性の体に憑依している。］な！？］

アルテマさんの言葉に聖王が驚愕する。

［僕の名は『オーディン』。害虫達《チート転生者》の欲望によって生まれたグリードさ。］

アルテマさんいや……オーディンが聖王に自己紹介する。

［貴方は何が目的ですか！何故姉様に憑依したのですか！］

［目的は単純、君を殺して僕が王となり害虫を駆除する事。何故この女性に憑依したか、この女性が君の姉で目的を達成するのに都合が良く更に最初に害虫を駆除しようとした時に邪魔されたから。］

聖王の質問にさらりと返すオーディン、何て恐ろしい奴なんだ……！

［ならば……ならば貴方を倒し姉様を救います！］

［ふむ……じゃあ僕も戦わなきゃね……変身！］

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

オーディンがベルトにコアメダルを入れ掛け声を言うと……欲望の王に変身した。

「『仮面ライダーオーズ』の『タトバコンボ』か……」

と、秦さんがさらりと言う。

本当に秦さんの世界に行ってみたいな。

［それは姉様の……！よくもぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！］

聖王が巨大な魔力を砲撃にして放つが……

［む。これはきついね。］

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プ・ト・ティラノ～～ザウルス！』

一瞬でオーディンは紫のコアメダルに入れ替えその砲撃を余裕で防ぐ。

「えぇぇぇぇ！？オーズの『プトティラコンボ』！？幾ら何でも卑怯過ぎるよ！」

と、秦さん。

［！？それは『ギル』の……まさか！？］

［ああ、恐竜系グリードの彼だったら階下で君の護衛兵達と戦ってるよ。いや……全グリードが階下で戦ってる。］

［な！？］

［君はアルテマの能力を忘れたのかい？妹のくせにとんだ大間抜けだね。］

［……『創造（クリエイト）』。］

［そう、彼女はコアメダルを精製しグリードからは一枚たりとも取っていない。］

［……姉様らしいですね。］

［ああ……そう［天照！］ふ！］

何処から戸もなく黒い焔が飛んで来るがオーディンは一瞬で氷結させる。

［ご覧……あれが害虫達さ。］

そこにいたのは翡翠の髪に金色の瞳の馬鹿デカい『何か』を連れた

男だった。
「……『ＮＡＲＵＴＯ』の『須佐乃御』か。」
と、秦さん。本当に詳しいよね秦さんて。

［あいつらは努力もしないでこの世界にはない能力を手に入れ好き勝手に暴れ周り本来あった歴史やストーリーを破壊し主人公のヒロイン達を奪い『死者蘇生』等絶対にやっちゃいけない事まで平然とやってのける最低最悪の害虫さ！僕はそいつらの欲望を吸って生まれた！だけどこいつらの欲望は最低最悪でね！『主人公より影の濃い役をやりたい』！『主人公にヒロインなんていらない』！『死んだ人を蘇らせてその人にフラグを建てたい』！等の欲望を見て僕は決めたこいつらを『皆殺しにする』とね！］
そう言ってオーディンは聖王を見ず男を見る。

［好き勝手言ってくれたね……やれ！］
須佐乃御がその拳をオーディンに振り下ろすだけど……

［ふん……一撃で殺してやる。］
オーディンが何処から取り出したのか斧の様な武器……「『メダガブリュー』だね。」メダガブリューにセルメダルを喰わせた。

『ゴックン！プ・ト・ティラノ～～必殺！』
［消し飛べ！『ストレンジドゥーム』！］
オーディンが斧を銃に変更しビームを放ち……一瞬で須佐乃御を消し去った。

［何……［死ね。『グシャ！』］！？ギャアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？］
男が動揺している内にオーディンが接近しメダガブリューで男を真っ二つにした。

［姉様……いえオーディン……］
聖王は悲しそうにオーディンを見つめるいや僕もだろう……オーディンは悲しい存在だ。

［同情かい侮蔑かい蔑みかい？］

［そのどれでもありません……私を殺しても構いません。］

［何！？］

［貴方は哀れな存在です。自分の産みの親とも言える存在の欲望を知ったが故に己の役目をそれを殺す事に捧げる。］
そう、それは僕も思っていた事だ。
オーディン……君は歪んだ存在故に自分の産みの親の歪みを許せなかったんだ……

［そうかい……じゃあ一息に殺してやる……て言いたいとこだけど僕はここで消えるらしい。］

［え？］

［アルテマが漸く自分の体の主導権を奪還したんだ。僕の人格はコアメダルからも弾き飛ばされ消滅する。］
オーディンはそれが運命であるかの様に淡々と言う。

［な、何故それを私に？］

［……償いかな？］
聖王の言葉に若干言葉を濁らせながらオーディンが答える。

［償い？］

［僕は君の姉に憑依し好き勝手に体を操ってしまった。それに対する償い。］

［そう……ですか。］

［じゃあね聖王。君の姉を体を操って悪かった。］

そういってオーディンの変身が解けアルテマさんが現れる。

［姉様！］

［オリヴィエ……頼みがある。］

無事を確認するために駆け寄った聖王にアルテマさんが告げる。

［何ですか？］

［私を……封印しろ。］

最悪の言葉を……

［な……何故？］

［ふう……肉体の主導権を奪還したという事はだ。つまりコアメダルも支配してしまったという事だ。つまり……］

［！？姉様もグリードに……］

［ああ……だからさ。アンク達も転生者に全員倒されてしまったみたいだからな。それに此れはお前に対する贖罪さ。］

［贖罪……？］

［私は自分が聖王になりたくないばかりにお前に後継者の座を押し付け逃げた。最もその後もお前は私を姉扱いしてくれたがな……そして今回の失態。お前に封印される条件は揃った。］

アルテマさん……

［姉様……でも……］

［でもくそもあるか。さっさと封印しないと城下町に降りて暴れ回るぞ。後、封印方法はベルトにオーディンのメダルを含む全て種類のコアメダルをスキャンする事だ。］

［姉……様……解りました。］

涙ぐみながら聖王は封印の準備を整える。

そして……

［ふ、じゃあなオリヴィエ……肉親としてお前を愛しているぞ。］

［姉様……おさらばです。］

聖王が一斉にメダルをスキャンさせる。

『タカ！クジャク！コンドル！クワガタ！カマキリ！バッタ！ライオン！トラ！チーター！サイ！ゴリラ！ゾウ！シャチ！ウナギ！タコ！プテラ！トリケラ！ティラノ！ババムート！ワイバーン！キリン！』

辺りに全ての効果音が鳴り響きアルテマさんの周りが光り輝く。

光が消えた時には……アルテマさんはいなかった。

……

第三者ＳＩＤＥ

映像が終わった時には誰も何も言わなかった。
当然だろう聖王に姉がおり更にそれが彼らの敵でありそして悲しい過去を持っていたのだから。

「よくもまあ人の葬りたい忌まわしき過去を掘りあげてくれたな……覚悟しろ、貴様らを全員叩きのめしてやる。」
一人の当事者を除いて……

続く……

第六話～予言と憑依と忌まわしき過去～（後書き）

如何でしたか？
次回『聖王教会での死闘』
次の空にドライブイグニッション！

第七話～聖王教会での死闘～前編～（前書き）

長くなりそうなので二回に分けます。

第七話～聖王教会での死闘～前編～

第三者ＳＩＤＥ

「よくもまあ人の葬りたい忌まわしき過去を掘りあげてくれたな……覚悟しろ、全員叩きのめしてやる。」

アルテマが歩きながら言い……

「「「（そんな馬鹿な！？！？）」」」

機動六課の誰もがその状況に驚愕し唖然としそして呆然となった。

まさか、今回の事件の最重要人物の一人が単独でいるとは誰も思わなかったのだ。

「……の、前にちょっとばかり『姪』に挨拶をしないとな。」

その間を突破の材料にするにはアルテマにとっては屁のカッパである。

「「「な……！」」」

機動六課メンバーが呆然としている間にアルテマは『ヴィヴィオ』に迫る。

「駄目！」

「ヴィヴィオ逃げて！」

ヴィヴィオの義理の母親であるなのはとヴィヴィオの初恋の少年の義理の母親である（カリムはヴィヴィオがゼロムが好きという事を知っている。）カリムが悲鳴を上げた……

……瞬間アルテマがヴィヴィオの頭に手を置いてワシャワシャした。
「「「「……へ？」」」」
その場にいたアルテマ以外の誰もが惚けた表情になった。
「ふ、いきなり頭を撫でられるとポカンとした表情になるのは本当にオリヴィエそっくりだな。」
アルテマが自分がグリードになる前の最愛の妹の昔の姿を思い出しつつ苦笑する。
「高町なのはとカリム・グラシアムだったか？安心しろ、高町ヴィヴィオには一切手をださん。オリヴィエのクローンと云う事は私の姪と同じだ。ついでに頭を撫でているのも同じ理由だ。大体私はちゃんと『姪に挨拶しないとな。』と言った筈だ。」
アルテマは自分が何故ヴィヴィオの頭を撫でているのかについて理由を述べた……
「……が、余計な事をしたからにはまずこの腐れ科学者を血祭りにせねばな。」
瞬間スカリエッティの目の前で騎士剣『斬鉄剣』を構えたっていた。
「何……！」
「死ね。」
振り下ろした瞬間セイバーが辛うじて間に合い斬鉄剣を己の剣で払いのけた。
「む、何をする。」
「『何をする』ではありません！何の武器も持たぬ人間に貴女は刃を向けたのですよ！解ってるのですか！？」
アルテマの行動に騎士として憤りを感じているセイバーにアルテマ

が告げたのは……

「何を言っている馬鹿が。」

侮蔑の言葉だった。

「な……！」

「お前の言っている事は確かに正しいさ。だがな、そいつは『元』犯罪者だ。人の妹のクローンを大量殺戮兵器の起動キーに仕立てあげ更に人造魔導士の製造……百回殺しても飽き足りん位だ。」

アルテマは驚愕するセイバーに淡々と事実を告げる。

「大体ここの奴等は甘すぎる元犯罪者の娘や現行犯を抱えそれを使役する。『悪い奴は悪い』と割り切り殺せば良い。どうせ『正義』は何かを犠牲にせねば完遂出来ぬ物だからな。」

誰も何も言い返せなかった。

アルテマの言葉が的確すぎ更にアルテマの理論は完璧に正しいからだ。

「ほう……気が合うな。」

ただ一人……アーチャーを除いて。

「……何者だ？」

「ふむ……アーチャーだ。アルテマよ。」

「そうか、『気が合うな』とは？」

「私も正義は何かを犠牲にせねばならないと思い『九を護るために一を捨てる』という事をやっていたからな。」

「ふ、確かに気が合うな。」

「だが……だからといって他の人間の正義を馬鹿にされる筋合いも無い。『投影（トレース）・開始（・オン）』！」
たちまちの内にアーチャーの両手に陰陽剣『干将・莫耶』が出現しアーチャーはそれを構え走りだす。

「ち！」
ガキィィィィィン！
アルテマは辛うじて防ぐが……

「止めたのが貴様の失策だ！『刺し穿ち貫き通す槍（ゲイボルグ）』！」
瞬時にアーチャーは『サーヴァントランサー』こと『クーフーリン』の愛槍『ゲイボルグ』を使いアルテマを突く。

「馬鹿が！『我に反逆する者を全てを凍らせ滅ぼす槍となれ』！『氷龍の牙（グングニール）』！」
即座にアルテマは巨大な突撃槍（ランス）を出現させゲイボルグと激突させ氷結させる。

「ぐ！？」
「失せろ！『全てを断ち切り葬り去る剣となれ』！『斬鉄……「『トライパニッシャー』！」「『ディバイダーバースト』！」「『ハイマットフルバースト』！」何……！ぐあぁぁぁぁぁ！？」
怯んだアーチャーに斬鉄剣の真名を解放し切り裂こうとしたアルテマに巨大な光の砲撃が炸裂し吹き飛ばされる。

「てめえがゼロムを……！それにお袋まで貶しやがって……ぶっ飛ばす！」

「ゼロム兄を返して！」

「貴方を倒します！」
そう言いながらアルテマに突進したのはゼロムが違法研究所から救い出しそして機動六課と共に『ＪＳ事件』を解決した三人……
上から順に
『ヨハネ・ハウラオン』
『高町雪菜』
『ペテロ・グラシアム』という。

「行くぜ『スサノオ』！」『ああ！行くぞ！』

「ちぃぃぃぃ！」
ヨハネが己のデバイス『スサノオ』の両手の刃で斬り掛かれば……

「『フリーダム』！『ハイパーフォルテス』！」

『了解！』

「な！？ぐは！？」
即座にアルテマを雪菜が己のデバイス『フリーダム』で砲撃する。

「行くよ『夜叉』！」

『おうよ！』

怯んだ隙にペテロが己のデバイス『ディバイダー・夜叉』の盾と刀を構え突撃をかける。

「ぐぅぅぅぅぅ！」
堪らず後退したアルテマを待っていたのは……

「『白式』！『雪羅』！」
『了解だ、一夏！』
「『ギー太』！『バーストソング』！」
『オッケー、唯！』
「『村雨』！『ソードキャノン』！」
『おうよ、明久！』

一夏、唯、明久による砲撃魔法の三連打である。

「（これは……しょうがない。創造（クリエイト）来い『ギル』、『変身』。）」

ズガァァァァァン！
轟音が鳴りアルテマがいる辺りが土煙に覆われる。

「やったか！？」
「一夏！それ生存フラグ！」
「いや、生きてた方が良いでしょ！？」
一夏、明久、唯の順にアルテマの生死を考える会話が出る。

「ヨハネ……」

「お袋、あんたは確かに前は犯罪者の娘だったよ。でもな……あんたは今は俺の義母さん《おふくろ》であり管理局の執務官『フェイト・T・ハウラオン』なんだ。気にすんなよ。」

「……ふふ、十二才のヨハネに説教されるだなんてね。」

「ほっとけ。」
ヨハネはフェイトに誉められ顔を赤くし……

「……ペテロ、お前強くなったな。」
「ヴィータ副隊長に少しでも速く追い付く為に頑張りましたから。」
「……バーカ。」
ヴィータは自分が好きな少年の言葉に顔を赤くし……
「雪菜大丈夫！？」
「お姉ちゃん！」
「あ、お義母さん！ヴィヴィオ！」
「もう！貴女は無茶して！」
「お義母さん！過保護過ぎるよ！」
なのはの自分に対する過保護に少しばかり辟易しつつもそれでも心配してもらえた事に雪菜は安堵し……
「おいおい……ほっとかれると本気で辛いぞ？」
アルテマはそれらに声を掛けた。
「げ……やっぱり生きてたのかよ……」
「一夏、君が生存フラグを建てたからだよ？」
「いや、それ関係無いでしょ。」
そして彼等が見たのは……
「よう。」

仮面ライダーオーズ『タトバコンボ』へと変身したアルテマと……

「この程度でアルテマにかなおうとするとはな……なかなか思い切った奴等だ。」

紫の恐竜の様な生命体……恐竜系コアメダルのグリード『ギル』がいた。

「みんな、下がってろ。こいつは僕がやる。」

レイスが槍を構えアルテマとギルに突撃する。

「ふーん……お前が大将か……『お前は私に触れる事は出来ない』。」

次の瞬間……レイスが吹き飛ばされた。

「な、何!?（一体何が起きた!?）」

「ああ、さっき弾き飛ばされた事か。簡単な事さ古代ベルカの魔法で私は『想念魔法』と呼んでる物でな。『言霊』を引き出す魔法さ。最も今じゃ廃れてるみたいだけどな。」

「言霊……つまりさっきのは『レイスさんは貴女に触れられない』って言霊を引き出したんですね?」

「正解だ。ついでに……『私はお前の後ろにいる』。」

アルテマの魔法の事を一発で理解したペテロの後ろに……巨大な斧を持ったアルテマがいた。

「な……」

「こういう事さ。『天を駆ける稲妻となり闇を葬れ』……『ゼウス

の雷』。」
斧の真名が解放されペテロは一撃で弾き飛ばされた。

「が……」

「てめえええええええええ！『ラケーテンハンマー』！」
即座にヴィータがハンマー『グラーフアイゼン』を振り下ろす。

「『お前の一撃は効かない』。」
アルテマは一瞬で防ぐ。

「んな……馬鹿な……」

「……はあ、仕舞だ。」
『スキャニングチャージ！』
オーズスキャナーから音が出た瞬間アルテマは舞い上がり舞い上がるにつれタカ、トラ、バッタの順でサークルが出現する。

「死ね。」
アルテマはタトバコンボの必殺技である『タトバキック』を出し……

「危ないのじゃ！」
秀吉が身体で防いだ。

そして……秀吉はまともにタトバキックを浴び吹き飛ばされ何回も床に叩きつけられながら床を転がった。

「な……に……？」
予想だにしなかった事態にアルテマは動揺し……

「ひ……秀吉？秀吉いいいいいいいい！」
明久は悲鳴を上げた。

「……」
ギルはのしのしと秀吉に向かって歩き……

「ギル……？」

「お前がこいつに適応するかは知らない。だが……命を粗末にするな。」
ギルは秀吉に『レリック』を埋め込んだ。

「！？そ、それは……！？」
カリムはギルが何を埋め込んだかに気付き愕然となる。

「……ふん。俺が元から持っていただけだ。」

「レリックを人体に埋め込むとはね……」

「貴様も同じ事をやっただろうが犯罪者が。」
スカリエッティの真面目な非難をアルテマはあっさりと払いのける。

「さてと……役者が揃う様だな。」
アルテマの言葉に全員がはっとなる。

そして空間に歪みが発生し……

「ギル！アルテマ！」
紅い鳥のグリード『アンク』が先頭に飛び出し……

「げ……！？」
約二名を見た瞬間『アラン・クアル』の顔が険しくなり……

「よっと。」
軽い感覚で『新垣秦』が出……

「……」
そして……雪菜、ヴィヴィオ、キャロにとっては初恋の人、ヨハネ、ペテロにとっては最高の恩人、カリムにとっては大切な義理の息子、シャッハにとっては大切な弟分の少年『ゼロム・グラシアム』が舞い降りた……

続く

第七話～聖王教会での死闘～前編～（後書き）

如何でしたか？
次回『聖王教会での死闘～後編～』
次の空にドライブイグニッション！

第八話～聖王教会での死闘～後編～（前書き）

秀吉が超強化されます。
マテリアル娘達も登場！

第八話～聖王教会での死闘～後編～

第三者ＳＩＤＥ

「『ディバインバスター』！」
ゼロムが現れた瞬間なのはは自身の得意魔法『ディバインバスター』を発射する。

「！？『輻射波動』！」
即座にゼロムはデバイスに搭載されている刀を引き抜き紅いバリアを展開する。

「腕は全然落ちてないみたいだね。」

「……初めて会った時もそうでしたね。」
ゼロムは自分が『白獅子』と呼ばれ管理局から次元犯罪者とみなされていた時になのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッター等と戦った時を思い出して言う。
（因みに初めて戦った時にはなのは達はライガーゼロのＣＡＳ（チェンジングアーマーシステム）とゼロムの類い稀なる戦術眼と戦闘力の前に完敗を喫した。）

「とか言いつつ実はゼロムに自我があるかどうか確認したかったんだろ？」
アランがなのはの意図を瞬時に読み取り告げる。

「うん……そして……君達が最低な奴等だって事もね！全力全開！『スターライトブレイカー』！」

「自我を残してゼロム君に仲間と戦わせて自分達は高みの見物なん

てなあ……ふざけんなやあ！鳴り響け！終焉の笛！『ラグナロクブレイカー』！」

「倒す……！絶対に！今日……此処で！雷光一閃！『プラズマザンバーブレイカー』！」

なのは、はやて、フェイトが怒号をあげながらそれぞれの最強魔法をアラン達に叩きつける……

「……（ごめんなさい）『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』発動、『チェシャ猫（チェシャ・キャット）』『空間断裂』。」

しかし、ゼロムが己の稀少能力の能力の内の一つを起動された瞬間空間に歪みが走り三つとも消滅してしまう。

「んな！？」

「嘘！？」

「無茶苦茶過ぎるよ……」

まさか自分達の最強魔法が稀少能力の能力一つで無効にされるとは思わなかった三人は硬直してしまう。

「遅い！」

即座にゼロムは刀を構え三人に斬り込む……

「させない！『ドラグーン』！」

「ぐ！？」

しかし雪菜のフリーダムの固有能力の一つに阻まれ……

「だありゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ヨハネが両手に刀を構えて斬り込み……

「『ディバイダーバースト』！」
アルテマから与えられたダメージから復活したペテロが盾の中に内蔵されているビーム砲で一気に仕掛ける。
「甘いよ……」
しかしゼロムが只の電子の粒子になる。
「ホログラム！？本体は何処に……『後ろだ！』！？危ね！」
ヨハネは危うい所をデバイスに救われゼロムが振るった刀を回避する。
「おいおい……敵はゼロムだけでは無いぞ！」
アルテマが腕に付いているクローを構え突き進み……
「『ＡＩＣ（アクティブインナーシャルキャンセラー）』作動。」
止まった。
「な、何……？」
「貴様とて私の『黒い雨（シュヴァルツレーゲン）』の前では無力だ……とっととそのガキを帰してもらうぞ！」
そう言いながら肩に付いているレールカノン砲を発射したのは……
黒い鎧の様なＩＳ（インフィニット・ストラトス）シュヴァルツレーゲンを身に纏った銀髪の少女『ラウラ』だった。
「ぐ……は……あ……」
「アルテマ！」
「やらせるかあ！『衝撃砲』発射！」
「行きなさい『ティアーズ』！」
「輸送車の時の雪辱！此処で晴らすよ！」

アルテマを救おうと走りだしたアンクに青いＩＳ『ブルーティアーズ』を身に纏った金髪のストレートの少女『セシリア』と黒いＩＳ『神龍（シャエンロン）』を身に纏ったツインテールの少女鈴と自身のデバイス『村雨』に身に纏った明久が攻撃を仕掛ける。

「ちぃぃぃぃぃぃ！」

「アラン……ちょっとばかり話があるよぉぉぉぉ！」

「行くぞ！」

アランがもといた世界で使い魔だったアルフとザフィーラが突撃を仕掛ける。

「（不味い……！）『ベリアス憑依』！『地獄の……』」

「やらせねえ！『ラケーテン・ハンマー』！」

「『紫電一閃』！」

召喚獣の一体『魔人ベリアス』を憑依し一気に焼き尽くそうとした秦にヴィータとシグナムが攻め掛かる。

「ち！」

「おっと～～、君の相手はお姉さんが勤めるよ！」

「……行くよ『打鉄弐式』。」

「君を此処で止める！」

援護しようとしたギルに自身のＩＳ『霧の淑女（ミステリアスレディ）』と『打鉄弐式』と『ラファール・リヴァイブカスタム』を身に纏った楯無と簪とシャルロットが止める。

「（行ける！このまま行けば勝てる！ゼロム君を救える！）」

明久は勝利を確信した……

「グリードを……舐めるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

アルテマはＡＩＣを無理やり打ち破りラウラを殴り飛ばす迄は……

「が……！」

「んな馬鹿な！？」

一夏は唖然となり驚愕もした何故ならＡＩＣを力ずくで打ち破りしかもラウラに一撃を加えるなど通常では考えられないからである。

「くくく……さてやるか……」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！サッゴーゾ！サゴーゾ！』

頭の『タカコア』を『サイコア』に体の『トラコア』を『ゴリラコア』に足の『バッタコア』を『ゾウコア』に変更した瞬間アルテマの頭はサイの頭を模した『サイヘッド』、体はゴリラの体を模した『ゴリラアーム』、足はゾウの足を模した『ゾウレッグ』へと変化しアルテマは『仮面ライダーオーズサゴーゾコンボ』へと変身した。

「行くぞ！」

そう怒鳴った瞬間……機動六課は愚かその場にいた全員がサゴーゾコンボの特徴である重力操作により膝をついた。

「あ……う……ぐ……！」

「ち……ちょっと待てアルテマ！俺達も巻き込んでるぞ！」

「あ、しまったやり過ぎた。」

そうアルテマは言いゼロムやアンク等の味方のみ能力を解除する。

「はあ……はあ……」

「し、死ぬかと思った……」

「すまんすまん。こいつの能力は加減具合が難しくてな……さて……そこの青髪の娘には不幸だが此処で死んでもらう。」

そう言いながらアルテマは重力を操作し少女『スバル・ナカジマ』を自分に引き寄せる。

「！？す、スバル！逃げて！」

「逃げられるわけが無いだろう？今、こいつは無重力に入るのと同じだ。最早自分の意志では逃げられない。ま、私が気紛れを起こして別の奴にする事を祈る事だな。」

明久の悲鳴にアルテマは絶望的な事を告げる。

「さてと……」

『スキャニングチャージ！』

スキャナーの音と共にゴリラアームに付いている武器『ゴリラバコーン』が青白く光、アルテマとスバルの間にサイ、ゴリラ、ゾウの順でサークルが出現する。

「死ね。」

「スバルぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」

ゴリラバコーンが無情にもスバルに向けて発射された……

……

秀吉ＳＩＤＥ

「（此処は……何処じゃ？）」

ワシは確かヴィータと言う少女（？）を助けようとしてアルテマと言う女に蹴り飛ばされて……それからどうなったのじゃ？

「……さてと……そこの青髪の娘には不幸だが此処で死んでもらう。」

ああ……あれはアルテマじゃ……そして無理やり連れて来られてる

のは……確かナカジマじゃったの……

「！？す、スバル逃げて！」

「逃げられるわけが無いだろう？今、こいつは無重力に入るのと同じだ。ま、私が気紛れを起こして別の奴にする事を祈る事だな。」

アルテマが明久に無慈悲な事を言っておる……ワシは無力じゃ……

『そんな事は無いよ。』

！？誰の声じゃ？

『私？私は闇の書のマテリアル。』

闇の書のマテリアル……？

『本来は有り得ないんだよ？この世界の闇の書は貴方たちの言葉で言う『アニメ展開』だから『ゲーム展開』である私は生まれない筈だったんだ。』

筈だった……？

『でもね……『チート転生者』って存在で『プレシア・テスタロッサ』が生き残って『アリシア・テスタロッサ』が生き返って『リィンフォース』は暴走しなくて『ジェイル・スカリエッティ』と『ナンバーズ』は捕まらなかった。その歪みが今ここで発生しているの。』

ならば何故ワシにそれを伝える？

『ふふ、君がイレギュラーになったからだよ。』

イレギュラー……？

『君は『レリック』って云う『ロストロギア』を埋め込まれたんだ。だからこそ私と話せるの。』

そうかの……

『ねえ……君の名前を教えて？』

……何故じゃ？

『僕が……ううん、『僕等』が君の力になれるから。君が自分は無力って嘆いていたから。』

僕……漸く自分の口調で本音を言ったの。

『あう！？さっさと話しなよ！』

怒るでない……ワシの名は『木下秀吉』じゃ。

『秀吉？じゃあ僕の名前はね『雷光の襲撃者』って言うんだ。宜しくね。』

雷光の襲撃者……ならば『雷』じゃな。

『うん。』

『ならば我々も話さなければなりませんね。』

誰じゃ？

『私の名前は『星光の殲滅者』です。宜しくお願いしますマスター。』

ならば……『星』じゃ。

それからマスターは良い。

『僕の名前は『闇統べる王』だよ。』

『闇』じゃの。

『じゃ、行こう！君の仲間を救う為に！』

うむ！

……
ワシが雷達と会った暗闇から帰ってきて目を開けた時にはアルテマが拳を構えておる場面じゃった。

「さて……」
『スキャニングチャージ！』
音がなり拳が青白く光り、ナカジマとアルテマの間にサイ、ゴリラ、ゾウの順でサークルが現れる。

「（不味い……！）」
『（マスター焦らないで下さい。）』
！？誰じゃ！？

『（私はマスターのデバイスである『マテリアル』と申します以後宜しくお願いします。一応言っておきますがマスターは何時でも雷様達を召喚出来ます後、雷様達の意志で出てくる事も出来ます。因みにこれは『念話』という初歩魔法です。）』
ふむふむ……成る程。

「死ね。」
「スバルうううううううう！」
！？いかん！マテリアル！セットアップ！

『（了解いたしましたマスター。それから『星龍一閃（せいりゅういっせん）』を準備します。）』
解ったのじゃ！雷！星！闇！来てほしいのじゃ！

ワシは起き上がりながら手に持っている（恐らくマテリアルの基本の形態じゃろう）騎士剣を引き抜き振るったのじゃった。

……

第三者ＳＩＤＥ

「『星龍……一閃』！」
それは誰もが予想だにしなかった攻撃だった。
誰もが予測していなかった方向だった。
それは誰もが予測していない人物が放ったものだった……

「な……に……？」
アルテマはまたも途中で防がれた攻撃に驚愕しつつも攻撃の飛んできた方向に目を向け……呆然となった。

「ふう……間に合ったのじゃ……」
そこには髪がさっきより伸びており顔も完全に女寄りになっているがそれはギルがさっきレリックを埋め込んだ少年だった……デバイスと思わしき騎士剣を握っており彼の周りに三人の少女がいなければ。

「木下秀吉……押して参る！行くぞ、マテリアル！」
『了解です。マスター。』

「（デバイスが変わってる……ま、いっか。）行くよ『ライトニング』！」
『おうよ、お嬢！補助は任せな！』

「（ふむ……雷光の襲撃者だけでなく私もですか……しかも魔力の色も違いますね）行きますよ『スターダスト』。」
『了解しました。』

「（やっぱり僕も変わってるのか……）行くよ……『ミッドナイト』！」

『……承知。』

秀吉が黄昏色の騎士剣を持ってアルテマに接近し雷が金色の槍を持ってアンクに突進し星が銀色の槍とランチャー砲を合体させた武器をギルに向け闇が漆黒の刀を構えアランと秦に突撃する。

「ち……何い！？」

アルテマは秀吉がさっき放った『ベルカ式』の魔法ではなく『ミッドチルダ式』の魔法を使用しようとしているのを見て驚愕する。

「『トワイライトバスター』！」

黄昏色の魔力砲撃が発射されアルテマを吹き飛ばす。

「アルテ……「『ライトニング……ステーク』！」な！？何時の間に……ぐおぉぉぉぉぉ！？」

アルテマに近寄ろうとしたアンクに雷が槍に金色の魔力を纏わせ突きを放ちアンクに雷激を流す。

「ち！？「よそ見している場合ですか？『銀龍咆哮（ぎんりゅうほうこう）』！」ぐがはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

圧倒的な力に驚愕するギルに星の銀色の魔力砲撃が炸裂する。

「おいおいおい！やば……「『闇龍七閃（やみりゅうななせん）』！」うおわあ！？」

慌てるアランに闇が漆黒の魔力を纏った刀を一瞬で七回も振るい圧倒する。

「（不味い！リィン！行くよ！）」

『（はいです！）』
ゼロムがユニゾンしていたリィンと共同で魔法を使う。
「（詠唱破棄で威力は低くなってるけど……）『石化の槍ミストトルティン』！」
はやての魔法の一つ（リィン？とユニゾンしている為使用可能）であるミストトルティンを使用し秀吉達を牽制する。
「（でかした！）退くぞ！」
アランの言葉と共に慌てて全員がやってくる。
そしてゼロムは逃走用の爆弾を投下した。
「そういえば、織斑さんと衛宮さんってＪＳ事件終わったら織斑さんがシグナムさんに衛宮さんがシャマルさんに『告白する』って言ってましたよね！あれどうなったんですか？」
「「な、何て事言ってんだ馬鹿野郎！（最も受け入れられたけど……）」」
「一夏ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……？ちょっと話をしようか？」
「衛宮く～～～～ん……？何言ってんのかな？」
「げ！？鈴、落ち……『ズギュン！』せ、セシリア……？」
「あら外しましたわオホホホホホ……ホンキデコロシマス！」
「や、やべ……逃げ「られませんよ？（黒笑）」せ、セイバー！？落ち着「けるかーーーー！」げえ！？り、燐……ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

『……シグナムだったか？弟を恋人にしたいんだったら私を倒してからにしろ。』

『あ、ああ！（く、黒い！黒いぞ一夏の姉よ！）』

『……ゼロム達が逃げたが……ま、大変だなシャマルよ。』

『はい……』

『あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？ゼロム達が逃げ……『アキぃぃぃぃぃ！』『明久君！何時婚約したんですか！』って、ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？僕の腕が全く逆方向に曲がって新人類にぃぃぃぃぃ！？』

因みにこの隙にゼロム達が逃走したのは言うまでもなく……

「（あ、あれ？何で私、木下君に胸がこんなにドキドキしてるんだろ！？）」

一人青髪の少女が一人の少年に恋をした。

続く

第八話～聖王教会での死闘～後編～（後書き）

如何でしたか？
最後は完全にグダグダな気がする……
次はちょっとしたデート話になるかも？
次回『デートと父親と阿呆共』
次の空にドライブイグニッション！

第九話～デートと父親と阿呆共～（前書き）

スバルと秀吉のデート話です。

第九話～デートと父親と阿呆共～

秀吉ＳＩＤＥ

「（何故……こうなったのじゃ？）」

ワシ『木下秀吉』は三日前の事を思い出しつつため息をついた……

……

三日前即ち聖王教会が急襲（ここら辺は第八話～聖王教会での死闘～後編～を読んで欲しいのじゃ）され撃退した後明久達に星、雷、闇達を紹介した後（何故かレイスさんやユウヤさんはびっくりしておったのじゃ。）ワシが助けた『スバル・ナカジマ』の上司である『高町なのは』さんに……

「君、大怪我していたんだよ？シャマルに聞いたら『レリックを埋め込まれて怪我が治ったから良いけど下手をしたら死んでたわ』って言ったんだよね……」

何故かそこでワシは寒気がしたのじゃ。

「と、云うわけで……無理をした罰にスバルの願いを一つ聞いてもらおうかな！」

「何でそうなるんじゃ！？」

ワシは本気で突っ込みを入れたまあ罰を入れられるのは良い。

それが何故……

「何故ナカジマの願いを一つ聞くになるのじゃ！？」

ナカジマを助けたからかの！？

「え？嫌？じゃあ……私と『ＯＨＡＮＡＳＨＩ』をしようか？」

「（秀吉！受けた方が良いよ！）」
何故か明久が念話で悲鳴を上げたのじゃ。

「（何故じゃ？）」
「（なのはさんの『ＯＨＡＮＡＳＨＩ』はね……あれは話じゃなくて拷問なんだ……）」
？？？どういう事じゃ？

「（僕もやられてね……『スターライトブレイカー』で黒焦げにされたよ……）」
「慎んでお受けするのじゃ！！！！」
ブレイカー系統の魔法についてマテリアルにさっき聞いたのじゃが高密度の魔力を砲撃や斬撃で発射するものじゃと聞いて考えを百八十度曲げ速攻で引き受ける事にしたのじゃ。

「そう、じゃあ後はスバルと話してね。（頑張ってねスバル！）」
と、言ってなのはさんはどっか行ったのじゃった。

「あ～～～ではナカジマ……」
「スバルで良いよ。坂本君や霧島さんにも言ったし。」
「（雄二が霧島さんに拷問を受けてたのはそれが原因なのか……）」
雄二よ……哀れな。
それと霧島、主は何処まで雄二を縛る気じゃ？

「ではスバルよ、願いは何じゃ？」
よりによってお金はカバンに入れといたままじゃったからのう……
お金がかからん物にして欲しいのじゃ。

「う～んと……『デート』したいな！」
……は？

「あ〜〜〜それで良いのか？」
「うん。」
不味いお金が……
「「金が無いなら分けてやるから逝ってこい。」」
女子からの折檻でズタボロになった衛宮と織斑がお金を持ってきたのじゃ。
……ん？
「今、『行ってこい』の字が違った様な気がするのじゃが……？」
「いやいや、聞き間違いだろ。」
「ああ、そうだな、一夏！」
アッハッハッと笑う二人にワシは何故か寒気がぶり返したのじゃった。
……
と、いう会話が三日前にありこうしてワシは待ち合わせ場所である公園で待っておるのじゃ。
しかし……
［ようよう、お嬢ちゃん暇……『ズドン！』ひげ！？］
ワシを女と間違えたナンパ男が口説いてきた瞬間何処からか飛んできた魔力弾が首に当たったり……
［君、君の様な綺麗な女性が……『ガシ！グイ！ドカバキドゴ！』ギャアぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？］
突如現れた腕が同じように間違え口説いてきた男を茂みに引きずり込んでボコボコにしたりと何やら不穏な空気がするのじゃが……？

「あ、ごめん待った？」
そんな事がかれこれ十分も続いておる時にスバルが来たのじゃ。
因みに何故か『来た！撤収！』と、明久の声が聞こえたのは気のせいかのう……？

「ん？いや、そんなに待って無いのじゃ。」
実際約束の時間の十分前に来たからの。
……異変が起きたのはそのすぐ後じゃったが。

「そっか。じゃ、行こう！」
そう言ってスバルはワシの手を引っ張り始めたのじゃった……

「（追跡開始ね。）」
「（そうだね。）」
この小さな会話は秀吉及びスバルには全く聞こえなかった。

……

ワシとスバルはデート（？）の目的地である映画館の前に来た。
……何故かさっきから濃厚な殺意がワシの背中にビシバシ来とるのは何故じゃ？

「ねえ木下君、何見る？」
と、スバルの声に殺意に関しては一時置いとく事にして取り敢えず上映されとる映画は……

「……雄二、何見たい？」
「俺に自由をくれ……」

聞きなれた声に首を向けるとそこにはシックな縄付きの木製の手錠を付け更にこれまたシックな鎖付きの木製の首枷を付けられた雄二と鎖と縄を持った霧島がいたのじゃ。

「……え～と？木下君……何……あれ？」
「ああ、坂本と霧島には何時もの事じゃ。」
「何時もの！？何時も坂本君はあんな事されてるの！？木下君の学校ではあんなのが日常なの！？」
スバルが驚愕の声を上げる因みに周囲の客は雄二を見て……

［……何だあれ？］
［……何かのプレイか？］
［てか良いなあ……］
［変態が此処にいる！］
［い、何時もの事だと……？］
等々そんな声が雄二の周りで響いておるのじゃった。

「……雄二は何を見たい？」
「兎に角最速で終わる映画だったら何でも良い！！！」
雄二の魂の叫びが聞こえる。

「……じゃあこれ。二回。」
「じ、『地獄の黙示録』の完全版だと！？またか！？またこのパターンなのか！？しかも何で異世界なのにこれがあるんだ！？」
しかもまた長い映画じゃの……

「……じゃあ行こ。」
「帰る！」
雄二が何時の間に外したのか手錠と首枷を投げ捨て走りだす。

「……逃がさない。」
ズダン！↑霧島が地面を蹴った音。
バリバリバリ！↑霧島が改造スタンガンを雄二に押し付けた音。
「ギャアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？結局このパターンなのかぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
バタン！↑黒焦げになった雄二が倒れる音。

「ごめん、木下君ちょっと霧島さんに説教するから待ってて。」
スバルが霧島に向かって歩き出し周囲の客が霧島を押さえに掛かる。
良かったの雄二。
この世界はまともな人間が多いらしいのう……殺気！

「チェストぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」
「『マテリアル』！セットアップ！」
気合いと共に振り下ろされた木刀をワシのデバイスの『マテリアル』を展開し防ぐ。

「ホウ……ウマクウケトメタナ……」
何故じゃ？
この男性に恨まれる筋合いは……ん？
この殺気は……

「ククク……ヒトノムスメヲタブラカシタンダ……カクゴハデキテルナァァァァ！！！」
やはりかの。
こ奴の殺気清水の父親と同じじゃ。
つまりこの男性はスバルの父親かの？

「はい、そこまで！」
木刀を振り下ろそうとした男性の手首をガシイ！と掴んだのは何処

となくスバルに似た女性じゃった。

「ダレ……げ！？『クイント』！？何故此処が！？」「はあ……匿名で通報があったのよ『ゲンヤさんが映画館に殺気を纏いながら入っていきました。』って。で、私が来たわけ。」

と、クイントさん。

その人物に感謝じゃ。

「お、お父さんにお母さん！？何やってんの！？」

どうやら霧島に対する説教が終わったらしいスバルがやってきた瞬間驚愕の声を上げる。

……へ？

『お父さん』に『お母さん』じゃと？

「あ、君が木下秀吉君？私はスバルの母親の『クイント・ナカジマ』よ。宜しくね。」

と、クイントさん。

「は、はあ……宜しくお願いしますのじゃ……」

「ついでにスバルを宜しくね。」

？？？どういう意味じゃ？

「お、お母さん！気が早すぎるよ！／／／」

そして何故か顔を真っ赤にしながら突っ込みを入れるスバル。

「じゃあ、私は此処で。それとゲンヤさん。さぼった仕事と今回の件で家でたっぷり話があるから楽しみにしてね。」

「があァァァァァァァァ！覚えていろよ木下秀吉ぃぃぃぃぃぃぃぃ！」

物騒な捨て台詞を言いながらゲンヤさんはクイントさんに連行されたのじゃった。

憎むべくは織斑と衛宮じゃな、スバルに過保護な父親が入ると知っていながらお金を出すとは許すまじ……！

「全く……士郎に一夏は困ったものだね。」

「本当にそうね……」

「「……何でいるんじゃ（いるの）！？明久にランスター（ティアに明久）！」」

「え？秀吉の初デートの応援だよ？」

「＋スバルのね。因みに通報したのは私達よ。」

全くこ奴は……ん？

明久の後ろから何やらどす黒い殺気が……

「のう明久……」

「うん……解ってるよ秀吉。」

「アキぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」

「明久君！ランスターさんとの婚約今日こそ解消してもらいますよ！」

やっぱりこの二人（姫路&島田）かの。

「やれやれ……逃げてくる。」

「頑張るのじゃ。」

「ん。」

明久がランスターの手を握り走りだす。

ここ三日間で感じた事じゃが明久とランスターの絆は岩……いや、

ダイヤモンドよりも堅いのあの二人では砕けまい。

「……あ～～なのはさん？馬鹿が二名また明久を追ってるからボコシテ下さい。」

「全く……いい加減吉井が振り向かない事を自覚すればいいものを。」

「シグナムの言う通りだがそんな簡単に自分の意志を変えられる奴がいたら見てみたい。」

「士郎の言う通りね。」

……敵が二名おったが恋人も一緒に入るから見逃してやるとしよう。

……

スバルＳＩＤＥ

「ごめんね、木下君今日はドタバタに巻き込んで。」

私『スバル・ナカジマ』は今日デートを約束した木下君に謝る。

まさかお父さんが暴走するだなんて……

ギン姉とティーダ（ティアのお兄さんでギン姉の恋人）義兄さんの件で懲りたと思ったのに……

「いやいや、スバルの所為では無い。元凶は、衛宮と織斑じゃしの。」

木下君は気にするなと言ってくる。

うう……優しいなあ……

「それに……」

それに？

「こんな事はＦクラスでは日所茶飯事の部類にも入らん。」

「いや一体Fクラスってどんなクラスなの！？」
霧島さんや坂本君の時もそうだったけど木下君や明久って何処となく『普通』の感覚が一般人と違うような気がする。

「うーむ……聞くかの？」
「うん。」
大体木下君の日常知りたいし。

「あ～～～まず設備がボロい卓袱台と座布団と腐った畳と叩いただけで崩れる教卓と落書きやひび割れだらけの教室じゃと云う事じゃの。」
どうしようういきなり常識外れの設備だ。
真新しい座布団や卓袱台なら兎も角ボロいは無いと思う。

「次にクラスメイトが『異端審問会』と言う名の私刑をする事じゃの。」
……目眩がしてきた。

「最後に試験召喚戦争で負けたら設備がみかん箱と座になることじゃの。」
……文月学園ってどういう性格の人が設立したんだろう？
そんな無茶苦茶な設備だったら先ず体が弱い人は体調崩す気がするんだけど？

「ま、こんなとこじゃの。」
「うん、何かもう木下君って凄い環境で勉強してたんだね。」
有り得ないような環境だよ……

「しかし……文月学園に入れたからこそワシは明久や雄二、ムッツリーニに姫路に島田と会えたんじゃ。これは文月学園に入って一番

嬉しい事だったの。」
そういえばそうだ。
明久は普段頼りないとこもあるけど誰よりも努力家で優しくて友達思いだし、会って三日だけど坂本君は見た目よりずっと賢いし冷静だし明久達をまとめるリーダー的な所もある。
残りの四人は……駄目だ良いとこが見つからない。

「それから……」
「それから？」

「スバルに出会えたしの（にっこり）。」
「……ふえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？い、いきなり何言ってるの！？／／／」
私は頬が凄く暑くなるのを感じながら突っ込みを入れる。

「そ、それはそのなんとなくじゃ……（良く良く考えたらいきなり何をとち狂った事を口にしとるんじゃワシは！？）／／／」
木下君が顔を真っ赤にしながらそういってくる。

「あはは……ありがと。じゃあねまた明日！」
私は聖王教会の前で木下君と別れ歩き出す。

お母さん、ギン姉、私……恋しちゃった……

次の日明久とティアの私達のデート応援が思わぬ展開に発展するとは神ならぬ私には解らないかった。

続く

第九話～デートと父親と阿呆共～（後書き）

如何でしたか？
次は星たちの設定やヨハネ達の設定を説明します。

次回『説明とデバイス紹介』
次の空にドライブイグニッション！

説明とデバイス紹介（前書き）

オリキャラと星達の設定です

説明とデバイス紹介

ヨハネ・ハウラオン

年齢…十二歳

身長…１５９？

体重…６２？

容姿…緑に赤が混じった髪を腰まで伸ばしている、翡翠色の瞳、イケメン（アラン同様本人自覚無し）

性別…男

好意を持つ人間…フェイト、なのは、はやて、キャロ、エリオ、カリム、スバル、ティアナ、明久、一夏、士郎、唯、ゼロム、ペテロ、雪菜

嫌悪する人間…人の恋路を邪魔する人間、グリード、フェイトを貶す人間、機動六課を犯罪者集団と呼ぶ人間

レアスキル…『ヴェーダ』

魔力ランク…ＡＡＡ＋

デバイス…スサノオ

説明…『プロジェクトＦ』が変質して創られた人造魔導士。ヨハネ

は『タイプゼロワンイノベイター』と呼ばれておりスカリエッティも『彼等は珍しいタイプの人間だ』だと言われる程の特異な魔導士である。
ヨハネ、ペテロ、雪菜を創った技術チートの転生者が『リボンズ・アルマーク』と『アリーアル・サーシェス』の遺伝子を元に作った為二人の容姿を足して二で割った容姿となった。
チート転生者がなのは達を打倒しハーレムにするために作った為常に従順になる様に創られたがある時に『アリーアル・サーシェス』の方の遺伝子の影響で殺害した後管理局に保護の名目で違法研究所に叩き込まれ理不尽な実験をされていたがゼロムに救出され彼の心意気に打たれペテロ、雪菜と共に彼の義兄弟になった。
ゼロムがフェイトに撃破され保護された後彼女に保護され自分と同じ存在だと知ったフェイトの養子になった。
ＪＳ事件の時にリボンズとサーシェス、二人の遺伝子の記憶に翻弄され一時絶望しかけた事があったが最終決戦の時にフェイトとスカリエッティのアジトに突入しフェイトがスカリエッティに味方していたチート転生者に撃破され自身も気絶していた時に二人と対面し二人の記憶もまた自分なのだと知り二人の記憶をフル活用した戦い方でチート転生者を殺害した後フェイトと共に『プラズマザンバーブレイカー』を放ちスカリエッティを撃破した。

デバイス説明
『スサノオ』
ヨハネの専用デバイス、声は『グラハム・エーカー』。
グラハム・エーカーが搭乗していたモビルスーツ『スサノオ』を雛型にしているため武装はオリジナル準拠だが幾つかオリジナルにはない武装もある等相違点も見られる。

武装
大型サーベル『雲龍』…一

大型サーベル『不知火』…一
大型サーベル『蒼天（雲龍、不知火の合体形態）』…一
トライパニッシャー…一
ビームチャクラム…一
ショートサーベル『黒龍』…一
ショートサーベル『白龍』…一
ショートサーベル『双龍（黒龍、白龍の合体形態）』…一
ＧＮファング…十六

高町雪菜

年齢…十二歳

身長…１５８？

体重…なのはの砲撃を食らい測定不能

容姿…『キラ・ヤマト』を女にした顔に金髪、水色の瞳

性別…女

好意を持つ人間…なのは、フェイト、はやて、ヴィヴィオ、カリム、明久、唯、士郎、一夏、ゼロム、ペテロ、ヨハネ

嫌悪する人間…人の恋路を邪魔する人間、機動六課を犯罪者集団と呼ぶ人間、グリード、なのはを貶す人間

レアスキル…『Ｓ．Ｅ．Ｅ．Ｄ』

魔力ランク…ＡＡＡ＋

デバイス…フリーダム

説明…ヨハネ同様プロジェクトFが変質して創られた人造魔導士。
雪菜は『タイプゼロツーコーディネーター』と呼ばれていた。
技術チート転生者は雪菜に『キラ・ヤマト』と『ラウ・ル・クルーゼ』の遺伝子を元に創ったので二人の容姿を足して二で割った容姿をしている。ヨハネがサーシェスの遺伝子の影響でチート転生者を殺害した際に雪菜もクルーゼの遺伝子の影響でヨハネと共に転生者を殺害した。
その後管理局に保護の名目で違法研究所に叩き込まれ理不尽な実験をされた。
ゼロムに救出された際に管理局員に魔力弾で重傷を負い死にかけるもゼロムが諦めずに雪菜を看病したりしたためゼロムに惚れた。
ゼロムがフェイトに撃破され彼が保護された後彼女の元気さに惹かれたなのはの養女になった。
ＪＳ事件の際にヨハネ同様クルーゼとキラの相反する記憶に苦しめられるが自身が創られた人間の為クルーゼの気持ちが痛い程よくわかっていたためヨハネ程重症ではなかった。
最終決戦の際にディエチの砲撃とクアットロの策、そしてヴィヴィオの力に敗れたなのはを救う為に二人の記憶と折り合いを付けレアスキルをフル活用しなのはと同時に『スターライトブレイカー』を発動しヴィヴィオに勝利した。
因みにヴィヴィオ、キャロ、リィンとはゼロムをめぐる恋のライバルである。

デバイス説明
『フリーダム』
雪菜専用のデバイス声は『アスラン・ザラ』の声。
キラの搭乗していたモビルスーツ『フリーダム』を雛型にしている

が雪菜が様々な武装を付け加えた為にゼロム曰く『自由（フリーダム）と言うよりは虐殺者（デストロイ）と言った方が正しい。』と言うくらい過剰な武装を構えたデバイスになってしまった。

武装

大型ビームサーベル…二

スーパードラグーン機動ウィング…八

ドラグーン…十六

高出力ビームライフル…二

パルフィオマフィーナ…二

レールキャノン…二

グラビィティブラスト…二

大型ミサイルポッド…二

腕部内蔵ガトリング砲…二

シールド内蔵ビームガトリング砲…一

デイバイアントビームランス…二

ペテロ・グラシアム

年齢…十二

体重…57？

容姿…メガネに黒と銀が混じった髪、黒の瞳、男の娘

性別…男（明久曰く『第三の性別秀吉』）

好意を持つ人間…ヴィータ、カリム、シャッハ、フェイト、なのは、はやて、唯、明久、一夏、士郎、ゼロム、ヨハネ、雪菜

嫌悪する人間…人の恋路を邪魔する人間、機動六課を犯罪者集団と呼ぶ人間、グリード、仲間を貶す人間

レアスキル…『月光蝶』、『ニュータイプ』

魔力ランク…ＡＡＡ＋

月光蝶使用時…ＳＳ＋

デバイス…ディバイダー・夜叉

説明…ヨハネ、雪菜同時にプロジェクトＦが変質して創られた人造魔導士。

ペテロは『タイプゼロスリーニュータイプ』と呼ばれていた。

技術チート転生者は『ガロード・ラン』と『ロラン・セアック』の遺伝子を元に創った為に二人の容姿を足して二で割った容姿をしている。

ヨハネと雪菜がチート転生者を殺害した時には参加しなかったがその後は他の二人同様に管理局に保護の名目で違法研究所に叩き込まれ理不尽な実験をされた。

ゼロムに救出され雪菜が重傷を負った際に怒りと悲しみで月光蝶が暴走しゼロムと共に研究所を原型が無くなるまで破壊した。

ゼロムがフェイトに撃破され保護された際に彼が何かを抱えていると感じたカリムがゼロム共々養子にした。

最初はニュータイプの能力で人の考えが読めてしまう為に一時自殺さえしそうになる自体になるがヴィータが『考えが解る位で自殺なんてするんじゃねえ！』と説教を食らっている時に『あたしが傍にいてやるから心配すんな！』と本音の考えを読んだ為にヴィータを好きになった。

ＪＳ事件の際にはガロードもロランも主人公だったからかヨハネ、雪菜とは違い記憶に苦しめられる事は無かったが二人の強さにコン

プレックスを抱いていた。
最終決戦の時にはヴィータと共に『聖王のゆりかご』のエンジンを破壊しに行くがチート転生者（ヨハネ殺害した人間とは別人）により『夜天の書』の騎士達のプログラムが掌握され裏切ったヴィータの攻撃を食らい気絶していた時に二人と対面自分の本音である『僕は二人程凄くなく強くもない』を二人にぶちまけるがガロードには『お前にはお前の強さがあるだろう！』と言われロランには『自分を信じなかったら君を信じた人達はどうなるんですか！』と説教され『自分の強さ』であるレアスキルとデバイスを合体させた魔法『ムーンライトセイバー』を使いヴィータを撃破しエンジンも破壊するという離れ業をやってのけた。（因みに破壊した後ヴィータに『何故殺さなかったんだ？』と問われた時に『ヴィータ副隊長が好きだからです。』と答えた為に『ヴィータに見合った強さになる』という条件付きで恋人になった。）
因みに炊事洗濯果てはデバイス製造（ヨハネ、雪菜、自分、カリムのデバイスを造った）や改造までやってのける人間で炊事については女性陣が両手両膝をついて泣いてしまう程である。

デバイス説明
『ディバイダー・夜叉』
ペテロ専用のデバイス声は『ガロード・ラン』の声。
ガロードが搭乗していたモビルスーツ『GXディバイダー』を雛型にしているがビームサーベル発生装置を積んだ刀『草薙の剣』や『サテライトシステム』、大型複合兵器『タクティカルアームズ』、ファンネルや『ディレクションライフル』を搭載している等相違点もある。
なおサテライトシステムを使用した兵装は草薙の剣を使った『サテライトセイバー』、タクティカルアームズのランチャーモードを使った『サテライトランチャー』、ディバイダーを使った『サテライトバースト』がある。

武装
ビームサーベル内蔵兵器『草薙の剣』…一
ディバイダーシールド内蔵ビーム砲…一
大型複合兵器『タクティカルアームズ』…一
ビームガトリング砲…二
ファンネル…十六
ディレクションライフル…一

木下星

年齢…十七歳

身長…１７６？

体重…なのはの砲撃を食らい測定不能

容姿…なのはを若干クールにした感じ

性別…女

好意を持つ人間…秀吉、唯、明久、なのは、一夏、雷、闇、フェイト、はやて、士郎

嫌悪する人間…仲間を貶す人間、秀吉を傷つける人間

レアスキル…魔力還元『星屑』

魔力ランク…Ｓ＋

デバイス…スターダスト

説明…元『闇の書』のマテリアル『星光の殲滅者』。本来ならゲーム展開の『闇の欠片事件』のマテリアル達は出現しなかったが転生者達が好き勝手に運命や展開をねじ曲げてしまった為に世界が修正した結果出現した。
秀吉を『マスター』と呼び兄として敬愛している。
因みに転生者である『高町ユウヤ』から積極的なアタックをかけられているが全て断っている。
因みに運動神経はなのはと同じくらい酷い。

デバイス説明
『スターダスト』
星専用のデバイス、声は『ニコル・アマルフィ』の声。
見た目は『ヴァイスリッター』の『オクスタンランチャー』を銀色にしたもので魔力弾をビームもしくは実体を持った弾丸として使用でき更に『カードリッジ』を弾倉として使用できる為にカードリッジが無くなるまで自分の魔力を消費しないという特殊な機構を持ち魔力刃を展開する事で槍としても使用できしかも形態を変化させる事で『ヴァイスリッター』の武装をそのまま装備する事ができる。

木下雷

年齢…十七

身長…１８２？

体重…フェイトに危うく斬られそうになり測定不能

容姿…フェイトを若干楽観そうにした容姿

性別…女

好意を持つ人間…フェイト、なのは、はやて、秀吉、明久、唯、一夏、士郎、闇、星

嫌悪する人間…仲間を貶す人間、秀吉を傷つける人間

レアスキル…魔力還元『雷』

魔力ランク…S＋

デバイス…ライトニング

説明…元『闇の書』のマテリアル『雷光の襲撃者』出現理由は星と同じだが秀吉の事を『秀吉』と呼び一人の異性として接している。（因みに秀吉は朴念人トリオ（明久、一夏、士郎）曰く『秀吉（木下）にも朴念人の気質がある。』と言われている。）転生者を毛嫌いしており（自分達が生み出される原因になったから。）良く転生者達をなのは達がいない場所で貶している。

デバイス説明

『ライトニング』

雷専用のデバイス、声は『デルフリンガー』の声。見た目は金色の槍（派手だから雷は結構気に入っている）だが形態を変化させる事で『アルトアイゼン』の武装をそのまま装備する事ができたり刀の形にしたりできる。魔力を流し込み相手に雷撃を加える事や魔力を雷に変えて離れた相手に射撃をする事も可能だが槍には大型のブースターが装備されているため基本的には高機動によるヒットアンドアウエイを得意とす

る。

木下闇

年齢…十七歳

身長…１６１？

体重…はやてに砲撃され測定不能

容姿…はやてを若干尊大にした容姿

性別…女

好意を持つ人間…はやて、なのは、フェイト、秀吉、明久、唯、一夏、士郎、星、雷

嫌悪する人間…仲間を貶す人間、秀吉を傷つける人間

レアスキル…魔力還元『闇』

魔力ランク…Ｓ＋

デバイス…ミッドナイト

説明…元『闇の書』のマテリアル『闇統べる王』。
出現理由は星、雷同様に世界の修正力が働いた為。
雷、星同様ににチート転生者に深い恨みを持っているが普段は表には出さない。
口調は少しばかりきついが秀吉の影響で『塵芥』等の悪口を言わな

くなった。
秀吉の事を『兄さん』と呼び兄として敬愛している。
背が低いのをコンプレックスにしておりうっかり口に出すと即座に魔法を撃たれる（雄二談）もしくは斬られる（一夏談）。
因みにはやてに似てはいるが料理はまるで駄目で良く料理が黒焦げになる。

デバイス説明
『ミッドナイト』
闇専用のデバイス声は『服部半蔵』の声。
見た目は漆黒の刀だが形態を変化させる事で『ブラックサレナ』の武装を装備する事ができる（但し闇が武器が少なすぎると言った為にビームサーベルとグラビィティブラストが追加された）。
更に周囲に闇を操り闇に敵を攻撃させたり闇を魔力に変えて魔力を補給する事も可能である。

説明とデバイス紹介（後書き）

如何でしたか？
次回『爆発と模擬戦と貞操の危機』
次の空にドライブイグニッション！

第十話～爆発と模擬戦～（前書き）

今回はバトルありません。

第十話～爆発と模擬戦～

明久ＳＩＤＥ

スバルと秀吉の初デートの翌日

ズバン！

ガラガラガラ……

「姫路に島田は入るかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

『スサノオ』を展開し更に両手に刀を持ったヨハネが扉をバラバラにして聖王教会に殴り込みをかけてきたのは本当に突然だった。

「うふふふふふふ……」

ついでにどす黒い殺気をだす（しかもデバイス展開して）雪菜も来ていた。

「あ、ヨハネに雪菜、さっき凄い勢いで逃げて行ったよ。（黒笑）」

ペテロもデバイスを展開していて姫路さんと美波が逃げていった方向を指差す。

「ひゃっはぁぁぁぁぁ！

狩りの始まりだ！」

ヨハネ……いくらなんでもヤバ過ぎるよその発言は……

「その前に仕事をほっぽり出して何やってんの？

『ヨハネ・ハウラオン』執務官候補に『高町雪菜』戦技教導官補佐。」

目の前になのはさんが現れた瞬間ヨハネ達は固まった。

「あの……せめてあいつらを……」
「私も同じ……暴力で無理矢理明久さんやティアナさんの婚約を解消しようだなんて最悪だよ……」
「僕もです……二人は好き合って婚約したのにそれに文句を言うなんて理不尽ですよ……」

「三人の言いたい事は解るよ？
でも、暴力に暴力で応じるのはあの二人と同じで理不尽じゃないかな？」
なのはさんの言葉に三人はうつむく。
うんうん、流石なのはさんだね。
あんなに猛っていた三人を抑えるのは並大抵じゃないね。

「それにさっき私が昨日の事で出て来た瞬間に『ディバインバスター』叩き込んだからね♪」
「「「「台無しじゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」」」
やっぱりこの人も三人と同じだ！
魔王だ！
『管理局の白い魔王』はやっぱり伊達じゃない！

「何か言ったかな吉井君？」
「何でもありません！」
危ない危ない……もしばれたら僕も黒焦げ行きだよ……

「でも困ったものですよね。
このままじゃ仕事にまで影響出かねませんよ？」
ペテロ言う通り二人は管理局の仕事で機動六課の隊舎に行こうとするのさえ妨害（ティアナが入るからだろうけど）するから仕事が滞ることさえある。

「うん、はやてちゃんもその事で困ってて後腐れなくなる様に『五対五』の『模擬戦』で決着つけようだって。」
因みに二人だけじゃなく皆（一夏や士郎の仲間も）魔力を持っていたんで六課に保護されている。

「模擬戦か……うし！やるか！」
「相手にとって不足無しです！」
「確かに後腐れもありませんね。
断る理由もありませんしやります。」
三人が了承したので僕等は黒焦げになって倒れていた姫路さんと美波を回収して六課隊舎に向かった。

……五対五？

……

「で、お袋！
何であんたが居んだ！？
」
「ヴィータ副隊長にシグナム副隊長もですよ！」
ヨハネとペテロが言った通り訓練場には姫路さんや美波だけじゃなくフェイトさんとヴィータ、シグナムさんもいた。

「ああ、テスタロッサはお前がどれくらい成長したか見るためにヴィータはペテロがどれくらい強くなったか見極めるために私は一夏がどれくらい強くなったか知るためだ。」
「この戦闘狂（バトルジャンキー）！」
「たはは……すまん。」

吠えるヨハネに一夏が済まなそうに謝る。
因みに五人には僕も含まれている。
『じゃあ、１０人とも準備は出来たね？』
なのはさんが僕等に準備が出来たか聞いてくる。
村雨の武装をチェックしてと……うん、大丈夫。

「行くよ、村雨！
セットアップ！」
『おうよ、明久！』

「行くぜ、スサノオ！
セットアップ！」
『承知した！』

「行くよ、フリーダム！
セットアップ！」
『解った！』

「行くよ、ディバイダー！
セットアップ！」
『おっしゃあ！』

「行くぜ、白式！
セットアップ！」
『解った一夏！』
僕達五人の体がバリアジャケットに包まれる。

向こうの五人もバリアジャケットを着てるから……行きますか！

『それじゃあ……レディー……ゴー！』

なのはさんの掛け声と共に僕達十人は走りだした。

続く

第十話～爆発と模擬戦～（後書き）

如何でしたか？
次回はフェイトとヨハネの模擬戦風景を書きます。
次回『それぞれの模擬戦～フェイトＶＳヨハネ～』
次の空にドライブイグニッション！

第十一話～それぞれの模擬戦～フェイトＶＳヨハネ～（前書き）

今回はフェイトとヨハネの模擬戦です

第十一話～それぞれの模擬戦～フェイトＶＳヨハネ～

ヨハネＳＩＤＥ

「スサノオ！
お袋の『あの』形態に着いていけるのは『あれ』だけなんだよな？」
『ああ、他にも方法があるかもしれないが取り敢えずあれだけだ。』
俺の質問にスサノオがあっさり答える。
だよな数分しか保たないと言っても『目の前』から『幻影』の様に消えるお袋の超速度をあれ以外どうやって捉えられるんだ？

「って、言ってる場合じゃねえな。
雪菜！俺がお袋をペテロがヴィータを一夏がシグナムをお前が島田を押さえろ！明久は姫路だ！」
「解ってるわよ！」
「了解！」
「解ってるよ俺だってシグナムと戦いたいんだからな！」
「姫路さんとか……解った。」
……最近一夏にシグナムの戦闘狂が移ったような気がしてならない。

「ヨハネ……よそ見は禁物だよ？」
「んな！？」
何時のまにかお袋が両手に大剣露出の多いバリアジャケットを装備する高速形態……『真・ソニックフォーム』になっていた。

「おいおい……いきなりそれかよ！
スサノオ！『蒼天』、『双龍』を転送してくれ！」
『承知！』
スサノオの答えと共に俺の両手に蒼い両刃の刀と両刃の白黒の小刀

が装備される。
因みに蒼い刀が『蒼天』、白黒の刀が『双龍』だ。
「序でだ！『トライパニッシャー』！」
俺の鎧の胸当て、肩当ての部分が開きそこにある三門の荷電粒子砲が火を吹く。

「甘いよ！『バルディッシュ』！」『ソニックムーブ』
しかしお袋の姿が一瞬で掻き消える。
真・ソニックフォームでのソニックムーブだけでもあの速度……あの形態だったらどんな速度になる……左か！

「「『ライオットセイバー』！」」
俺とお袋はほぼ同時に同じ魔法を使い相殺する。

「上手くなったねヨハネ。」
「ああ、始めて使われた時は対応出来なかったからな。」
大体俺はあの時はまだ素人だったしな。

［胸が揺れ……『ぶしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ』！］
［ムッツリーニいいいいいいいいいい！］
……外野で何が起きてるんだ？

「……外野で何が起きてるの？」
お袋も同じ疑問を持ったか。

「大方お袋の無駄に成長した胸が揺れるのを見て誰かが鼻血を吹いたんじゃないか？」
「あはは……それは無いんじゃ……」
因みにそんな事を言いつつ俺達は剣撃を続けている。

普通の形態で真・ソニックフォーム着いていけるからなスサノオ……ひいては作ったペテロは凄いな。

［残念ながら正解だムッツリーニが鼻血を出したんだ。］

「「……」」

スピーカーから坂本の声が響くと俺達は鍔迫り合いをしたまま顔を見合わせた。

土屋……お前どんだけ変態なんだ……

「ま、いっか。

……強くなったねヨハネ。」

「ん？ああ、前はお袋の速度に着いていくのが精一杯だったからな。」

ゼロムに守られていた頃、お袋の養子に成り立ての頃、そしてＪＳ事件の頃。

俺は三回お袋に挑み全て敗北だった。

だからこそ言う！

「今回で……勝つ！」

「……ふふふ、だよね、ヨハネは何時だってそうだもんね。」

お袋が鍔迫り合いを解除し俺から飛び下がる。

？どういうこった？

「行くよ、バルディッシュ。

……『ファントムフォーム』！」

来たか……！

その瞬間お袋の姿が『掻き消えた』。

……
外野ＳＩＤＥ
「「「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」
その場で模擬戦の様子を見ていたもの全員が驚愕した。

「ふ、フェイト隊長何時の間にあんな力を身に付けたの！？」
「い、幾ら何でも速すぎる！
まるで幻影だ！」
「……『ファントム』まさしくその名の通り。」
など様々であったが。

「ヨハネは……何やら楽しそうな表情をしとるのう。」
と、秀吉がヨハネの表情に気付き苦笑する。
ヨハネ自身気付いていないが彼もフェイトと同じくらい戦闘狂らしい。

「ところでヨハネにも切り札級の能力があるのか？」
「はあ、一応ありますけど……」
「あれはちょっと……」
霧島雄二の問いにエリオとキャロは言葉を濁す。

「まて作者、俺はまだ翔子と結婚していない。」
知るか。

「！？ヨハネ……使うんだ。」
唖然としたエリオが画面を見る。

そこには……真紅に輝いたヨハネのデバイスの装甲があった。

……

ヨハネＳＩＤＥ

「やれやれ……やっぱり使うか。」

ファントムフォーム……あのマッドサイエンティストの隠れ家で変な奴（確かお袋を『俺の嫁』とか言って俺を殺そうとしてた）と対峙した際に使った形態だ。

まあ、基本的に俺は変な奴『草薙賢』をお袋はスカリエッティを相手にしてたからあんまり見てなかったけど。

「さ～～～てと、スサノオ。頼む。」

『承知。『トランザム』……作動！』

俺の目の前の画面に『ＴＯＲＡＮＳＡＭ』と言う英語が現れ俺も希少能力『ヴェーダ』を使う。

『やあ、漸く僕の出番かい？』

そう言ったのはヴェーダの管制人格である『リボンズ・アルマーク』だ。

「ああ、頼む。

……『サーシェス』。」

『はっはあ！何の用だ？』

俺の答えたのはスサノオのもう一つの人格『アリー・アル・サーシェス』。

俺にとっては俺の元になった人物だが正直なって欲しく無かった。

それでも認める事が皆を救う道だと決めたんだ後悔なんざしねえ。

「ああ、『ファング』の操作、任せたぜ。」

『おうよ、任せな！』

そのまま俺はトランザムで性能が飛躍的に上昇した探査魔法を使いお袋の位置を探りそこに同じく威力が飛躍的に上昇したトライパニ

ッシャーを叩き込む。
「く！？」
出てきたお袋に向け俺は本来一夏のデバイスの能力である『瞬間加速（イグニッションブースト）』を使い高速で接近する。
『行け、『ファング』！』
スサノオのサイドスカートからオレンジの粒子を発する金属の牙『GNファング』が躍り出お袋にビームの雨を降らせる。
「ぐ！？ファングの連携に速度それにファントムフォームに高速で接近できる事……ヨハネ、やっぱりトランザム使ったんだ。」
「たりめえーだ。
お袋の最速に拮抗するにはこいつ《トランザム》しか無いって確信してんでな。」
大体マジで幻影みたいな速度には同じ位の化け物じみた加速しかねえ。
「よそ見してる暇はねえぜお袋！
こっから先は全部クライマックスだ！」
「何処でそんな言葉を覚えたのかな！」
お袋が俺に接近し大剣を切り上げ俺はそのを斬撃を紙一重で回避する事でさらなる追撃を防ぎ更に至近距離からスサノオの両腕に搭載されている『チャクラム』を射出する。
「な！？プロテクション！」
『プロテクション』
お袋がチャクラムを基本的な防御魔法の一つである『プロテクション』を展開し防ぐが俺はヴェーダ経由でプログラムした武器『ヴェスパー』を放つ。

「！この上新しい武器まで……『ライオットセイバー』！」
お袋はあっさりヴェスパーを切り裂きソニックムーブで接近しそのままの勢いで……

「『トライデントスマッシャー』！」
「まだだ！トライパニッシャー！」
得意の砲撃魔法を放つが俺はそれにトライパニッシャーを放ち相殺する。

「本当に強くなったねヨハネ！」
「まあな！」
俺はお袋に突撃し今までの全てを注ぎ込んだ集大成の魔法を準備する。

「！ブレイカー系統の魔法……なら私も！」
お袋が雷撃を溜め込みお袋の最強の魔法を準備する。

「勝つ……！
これでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「『双龍一閃』……」
「『雷光一閃』……」
これが……

「『ツインセイバー』……」
「『プラズマザンバー』……」
俺の……

「「『ブレイカー』！」」
全力全開だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
轟音と共に吹っ飛ばされたのは……
「おわあ！？」
俺だった。

トランザムが強制解除されふらふらの俺の首にお袋の剣が突き付けられ俺は両手を上げ降伏するしか無かった。

「はあ……俺の負けか。」
「うん、私の勝ちだけど……正直ヨハネがブレイカー系統の魔法を修得してたなんて知らなかったから慌てたよ。
あれまだ未完成でしょ？」
「……正解。」
そうあれはまだゼロムがいた頃に俺が編み出した魔法で対人戦で使うのはお袋が始めてなんだ。

「じゃ、完成してたら私の負けだったね。
……次の模擬戦に期待してるよ。」
「ぐ……！言ってろ！
次は勝つ！」

お袋……先ずはゼロムから越える！あんたはその次だ！首を洗って待ってろ！

しかし……この後俺は島田にとんでもない提案をされるとは思ってもみなかった。

続く

第十一話～それぞれの模擬戦～フェイトＶＳヨハネ～（後書き）

如何でしたか？
次回は一夏とシグナムの模擬戦を書きます。
次回『それぞれの模擬戦～シグナムＶＳ一夏～』
次の空にドライブイグニッション！

第十二話～それぞれの模擬戦～シグナムＶＳ一夏～（前書き）

一夏とシグナムの模擬戦です。

第十二話～それぞれの模擬戦～シグナムＶＳ一夏～

一夏ＳＩＤＥ

「白式、シグナムは今なんだ？」

『アギトの反応が無いからユニゾンをしていない事は解っているが……』

「解った、あんがとな。」

俺『織斑一夏』は目の前の敵に対峙するために周囲を見回して……！上か！

「『紫電一閃』！」

「させっかよ！」

振り下ろされた火炎を纏った騎士剣『レヴァンテイン』を刀『雪片弐式』を使う事で防ぐ。

本来雪片は単一仕様と相まって凄い威力を持つけどその分極端にエネルギーを消費する燃費の悪い武器だけど『デバイス』の時は全くエネルギー消費しないんだよな。

「ほう、上手く受け止めたな。」

「当たり前だよ、あん時からの歩みも止めてないからな。」

ＪＳ事件の最終決戦の時に操られていた俺にとって剣の師でありそして最愛の女性であり今戦っている人物『シグナム』は操られていた時はまさしく何でもありだったこの人らしく無い卑怯な戦法も使ったしな。

「ふ、それは良い事だ！」

首を狙って振るわれた剣を屈んで避けそのまま刀で足下を凪ぎ払う。

凪ぎ払いを避けそのまま打ち下ろしてきたのを多目的兵装『雪羅』を楯にして防ぐ。

「今だ！雪羅！『カノンモード』！」

『了解！』

そのまま雪羅の形態の一つを至近距離から発射するけど身を捻る事で避けられる。

「やっぱダメか……」

「当たり前だあの時に使ったやり方じゃないか。」

そういえば覚えてるんだっけ。

内心苦笑しながら離れ翼をエネルギーのミサイルの様に発射した。

「『エナジーウィング』か！

使い方は間違ってはいないが……甘い！

『飛龍一閃』！」

シグナムがレヴァンテインを連結刃にしそのまま振るい俺のいる場所まで届く剣とする。

「ぐ！？

相変わらず手加減も容赦も無いよな……」

「おいおい……お前は私の恋人であると剣友だぞ？

手加減も容赦もしない。」

「解ってるよ言ってみただけさ！行くぜ！」

そのまま瞬間加速を使い俺達はそのまま接近戦を開始した。

……ところで外野から尋常じゃない殺気がくるけど……俺、模擬戦が終わったら殺されるじゃねえか？

……

雄二ＳＩＤＥ

「「「「「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す……！」」」」」

「凄い……」

「一夏は本当に成長したな。

……恋人を作ったのは機に食わんが。」

「シグナムさんはかなりの使い手だね。」

「……そんな人に鍛えられたなら腕が上がるのも当然。」

俺『坂本雄二』は今『八神シグナム』と『織斑一夏』の戦いをモニターで見ているが……同時に織斑を好きな女子達『ラウラ・ボーディッヒ』、『シャルロット・デュノア』、『セシリア・オルコット』、『鳳鈴音』の尋常じゃない殺気に冷や汗を流していた。

織斑……強く生きろよ。

因みに冷静に観察しているのは『織斑千冬』、『篠ノ乃箒』、『更識簪』そして『更識楯無』の四人だ。

「ガルルルルル……もう我慢の限界だわ！一夏の馬鹿を殺す！」

「私も限界ですわね……」

「あっはは～～～僕も。」

「私もだ……」

「落ち着けお前等……ぷげら！？」

ゆらりと鳳達が立ち上がったのを見て慌てて俺は止めようとしてぶっ飛ばされた。

薄れゆく意識の中で見たのは織斑姉に出席簿らしき物で叩かれて轟沈する四人の姿だった。

……

一夏ＳＩＤＥ

「なんだろう俺、千冬姉に助けられたような気がする。」
「ふ、義姉さんが気になるのか？」
「シグナム、ストップ。
何で義理の姉になるんだ？」
「気にするな、ジョークだ。」
「そうか？」
そんな事を言いながら剣撃は最終局面に達していた。

「……拉致があかんな、『アギト』！」
「んあ……？何だよ？」
シグナムのバリアジャケットから出てきた妖精の様な少女はシグナムのユニゾンデバイス『アギト』だ。

「ユニゾンだ！行くぞ！」
「おうよ！」
やべぇ……

「ふあ～～～……およ？
一夏、誰と戦ってるの？」
！この声は！

「『桜』出番だ！」
俺のユニゾンデバイス『桜』の声だ。

「戦ってるんですね！
解りました！」

「「ユニゾンイン！」」

俺とシグナムの声が重なり俺達のバリアジャケットが変わる。
俺のバリアジャケットの周りには花弁が舞い更に雪羅が両手に装備され雪片を持っていない手に真紅の刀『紅桜』が装備される。
シグナムのバリアジャケットはチャイナドレスの様になり（目のやり場に困る……）レヴァンテインの纏う炎の量が当たったら洒落にならない量になる。

「さてと……行くか！」
「（了解です！）」

「行くぞ、一夏！」
「来い、シグナム！」
俺は紅桜を横凪ぎに振るいシグナムがレヴァンテインで受け止めた隙に雪片で突きを放つけどこれは気付いたシグナムがバックステップして避けられる。

そこにシグナムが強化された紫電一閃を放つが俺はそれをバリアジャケットの周りに舞う花弁『舞桜』を使って防ぐ。
因みに舞桜は一枚、一枚が白式の単一仕様『零落白夜』の能力を持ってるから防御にはもってこいなんだ。

「ち！相変わらずとんでもない防御力だな！」
「それはお互い様だろ！」
一枚、一枚が極限の防御力を誇ってるのにそれをまとめて十枚も燃やす攻撃力は何だ！？

「まだ行くぞ！」
「させるか！雪羅、発射！」
二発目の紫電一閃を二つに増えた雪羅の荷電粒子砲で防ぎそのまま

押し切る。
「何！？」
よし……いや、まだだ！
「『シュツルムファウスト』！」
何時の間に騎士剣から変更したのかレヴァンテインが弓になってい
てシグナムが燃え盛る弓を発射した。
「ぐう！？」
身を捻って避けたけどそんな隙を見逃すほどシグナムは甘くないし
また俺も思ってない。
「これで決める！」
シグナムが紫電一閃……いや、炎の量が紫電一閃を越えてる、もう
一方だ！
「白式、桜、行くぞ！」
『解ってる！』
「（任せて下さい！）」
俺は単一仕様を起動させ桜は自身の能力『月下落葉』を起動させた
為に雪片と紅桜は純白と真紅の光に包まれ更に二つを連結し双刃の
太刀にする。
「『火龍……』」
「『白龍……』」
……何だか一年前のＪＳ事件を思い浮かべちまった。
あん時はシュツルムファウスト食らって右腕使用不能になった上に
火龍一閃まで食らってからの大逆転劇だったな。
だけど……

「「『一閃』！」」
手加減なんてしない！
轟音が再び起こり二本の刃が宙を舞った。
まあ、つまり……
「ぐ……引き分けか……」
「はあ……あん時みたいな一撃でないな～～～。」
あん時は白龍一閃はビルを両断したからな。
「まあ、いい……強くなったな。」
「応「「「「一夏（さん）♪」」」」……助け……」
「シグナム……私を倒してから義姉さんと言えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
俺が鈴達にフルボッコされシグナムと千冬姉が切り合ったのは言うまでも無い。
続く

第十二話～それぞれの模擬戦～シグナムＶＳ一夏～（後書き）

如何でしたか？
次回はペテロとヴィータの模擬戦です。
次回『それぞれの模擬戦～ペテロＶＳヴィータ～』
次の空にドライブイグニッション！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9896w/

リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～チートに反逆する者達～

2011年12月3日09時49分発行